

第2章 尾道市の維持及び向上すべき歴史的風致

1 維持及び向上すべき歴史的風致の設定

歴史的風致とは、「地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動とその活動が行われる歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地とが一体となって形成してきた良好な市街地の環境」（歴史まちづくり法第1条）であり、次の3つの条件をすべて揃えておくことが、歴史的風致の前提条件となる。

- ① 歴史や伝統を反映した活動が、現在、行われていること
- ② ①の活動が歴史的価値の高い建造物で行われていること
- ③ ①の活動と②の建造物が一体となって良好な市街地の環境を形成していること

こうした条件を踏まえ、尾道市の歴史的風致を、第1章で示した6つの文化財の特性と関連文化財群を軸に検討すると、固有の価値と特色を有する大きく6つの歴史的風致を見出すことができる（下表）。

表 2-1 尾道市における歴史的風致の設定

歴史的風致	
歴史的風致 (名称・テーマ)	個別の歴史的風致 (サブテーマ)
(1) 中世尾道の寺社祭礼行事にみる歴史的風致	① 浄土寺と吉和太鼓おどり
	② 西國寺と柴燈護摩、節分会
(2) 近世尾道の港町文化にみる歴史的風致	① 八阪神社と祇園祭
	② 御袖天満宮と天神祭
	③ 住吉浜（住吉神社）と住吉祭
(3) 近代商業都市尾道の寺社祭礼行事にみる歴史的風致	① 一宮神社とベッチャー祭
	② 住吉浜（住吉神社）とみなと祭
	③ 山脇神社と山王祭
(4) 瀬戸田水道と港町の祭礼行事にみる歴史的風致	① 瀬戸田水道と祭礼行事
	② 港町瀬戸田の街並みと祭礼行事
(5) 茶園文化が息づく歴史的風致	—
(6) 港町や農山漁村の祭礼行事にみる歴史的風致	① 鉦太鼓おどり（風流）に関わる祭礼行事
	② 神楽に関わる祭礼行事

2 維持及び向上すべき歴史的風致の内容

(1) 中世尾道の寺社祭礼行事にみる歴史的風致

はじめに

自然の良港を持つ尾道は、平安時代の嘉応元年(1169)、備後大田庄(後、高野山領)の船津倉敷地、庄園米の積出港となって以来、遣明貿易船や内海航行船の寄港地として、中世を通じて繁栄を遂げてきた。港町としての発展は各時代に豪商を生み、多くの神社仏閣の寄進造営が行われた。

14世紀には、足利尊氏が戦勝祈願を行った浄土寺や備後国守護である山名氏の庇護をうけた西國寺をはじめとして、多数の寺院伽藍が足利将軍家や守護大名によって建立され、現在の寺のまち尾道の基礎が築かれたといえる。

こうした中世から続く港町としての様々な遺産は、各所にみられ、前述の2か寺の他に、重要文化財(建造物)をもつ西郷寺、常称寺、天寧寺等は開基が中世にさかのぼる寺院である。

中世の港町の遺構は、中世寺院建築だけでなく、市街地の地下に、尾道遺跡として埋蔵されており、現在まで200回を超える発掘調査により、中世の海岸線や町の様子が解明されつつある。加えて、そこから出土する大量の中国製陶磁器や瀬戸焼、常滑焼など日本各地の陶磁器、木製品から、当時の港町の繁栄ぶりがうかがえる。

15世紀には、室町幕府や守護大名の庇護のもと、更なる発展をとげ、明や李氏朝鮮との交易や使節の中継地となっていたことが、『老松堂日本行録』(1420)や『戊子入明記』(1468)、『海東諸国記』(1471)に記されている。

また、この頃から港町の地割が整備され、十四日町・防地町周辺から港の埋立や街並みの整備が行われたと考えられる。

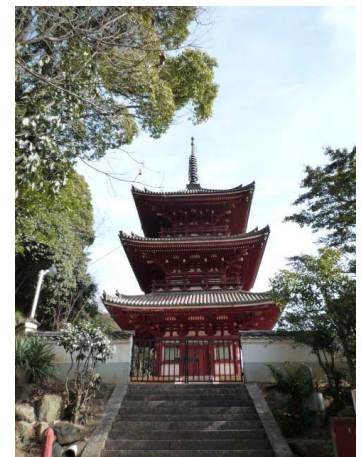
今川了俊の『道ゆきぶり』(応安4年(1371)九州探題として下向した際のものとされる紀行文)には、港町尾道の描写として、「ふもとにそいて、家々ところせくならびつつ、あみほすほどの庭だにすくなし」(山の麓に沿って民家が建ち並び、網を干せるぐらいの広さの庭も少ない)と現在と同様に民家や商家が密集する様子を記している。また、「遙かなるみちのく、つくし路のふねも多くたゆたいたるに」(東北や北九州方面への船もたくさん寄港している)と、東北や九州への船も寄港していた様子がうかがえ、中世の代表的な港町としての尾道の繁栄ぶりがみてとれる。

また、『老松堂日本行録』は応永27年(1420)に朝鮮官人宋希璟が瀬戸内海を経由して京都を訪れた行程記であり、浄土寺や天寧寺を訪れ、交流したことが書かれており、また、天寧寺参道の商家では、商人たちの賑やかな商談の様子が描かれている。

こうした港町の発展に寄与したのが、港町を取り仕切る商人たちである。周辺地域の様々な物資が集積する港町尾道では、多くの商人や問丸・梶取といった海運業者が生まれ、足利将軍家や守護大名の庇護を受けつつも、商人中心の町政運営が行われ、瀬戸内



浄土寺多宝塔(国宝)と阿弥陀堂(重要文化財)



西國寺三重塔(重要文化財)



西郷寺本堂(重要文化財)

有数の港町として繁栄した。そして、商人たちは、上記の寺社に多くの寄進を行い、寺社とともに港町尾道の祭礼行事も継承されてきたのである。浄土寺では、足利尊氏に由来する吉和太鼓おどりの奉納が行われ、西國寺では、中世の護摩行に由来する柴燈護摩と節分会が継承されてきた。

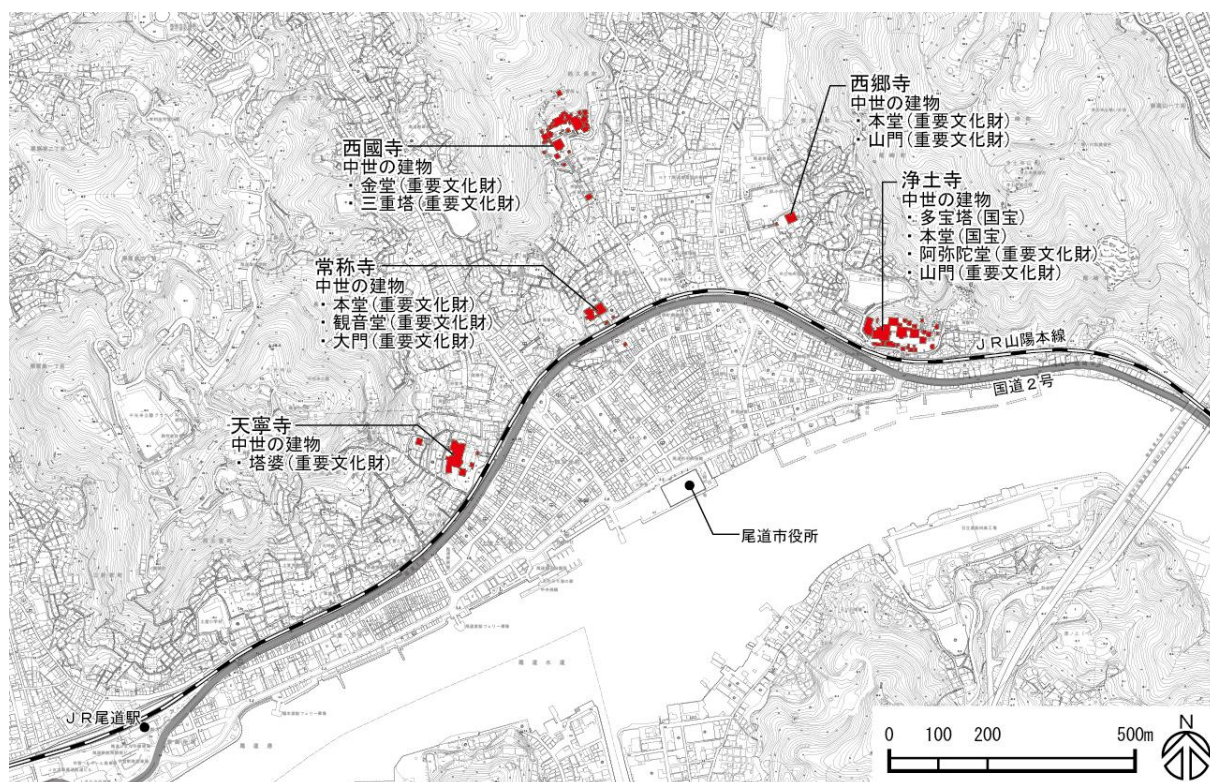


図 2-1 中世の建築物を有する寺院



天寧寺と天寧寺塔婆（重要文化財）



常称寺本堂と大門（ともに重要文化財）

① 浄土寺と吉和太鼓おどり

【建造物】

浄土寺

浄土寺は、推古天皇 24 年(616)、聖徳太子の開基と伝えられているが、鎌倉時代後期には、荒れ果てた状況になっていた。これをみた西大寺の定証上人は、里人の懇請を容れて浄土寺の再興を発願し、嘉元元年(1303)から同 4 年(1306)にかけて堂塔が造営された。しかし、そのわずか 20 年後の正中 2 年(1325)に火災に遭い、諸堂宇がことごとく焼失した。

このとき、尾道の商人、沙弥道蓮、比丘尼道性が発願して、本堂・多宝塔・阿弥陀堂等が相次いで再建された。その後は火災に遭うこともなく往時の姿を伝え、尾道を代表する古刹の一つとなっている。

境内には本堂、多宝塔や阿弥陀堂等の中世建築と方丈等の近世建築がよく残され、統一された寺院建築群となっている。



石段と山門



山門を通して望む尾道水道



図 2-2 浄土寺の伽藍配置

1) 浄土寺本堂（国宝）

本堂は、鎌倉時代の嘉暦2年(1327)に大工藤原友国、同国貞により建築されたものである。国宝本堂の附指定である本堂棟札には、「奉再建観音堂 嘉暦二年 大願主沙弥道蓮 比丘尼道性 大工藤原友国 同国貞」の墨書銘があり、鎌倉時代後期の建造物で建築年代及び製作者が分かるものとして貴重である。屋根は入母屋造、本瓦葺き、桁行五間、梁間六間で、前面二間通りを外陣とし、後を内陣とする密教式平面である。和様を基調としているが、さんからど 棧唐戸、はなひじき 花肘木、ふたつど 二斗等を用いたいわゆる折衷様式であり、瀬戸内地域に広く分布する折衷様式の代表例である。

2) 浄土寺多宝塔（国宝）

多宝塔は、元徳元年(1329)建立で、本堂同様に棟札が現存し、「奉再建多宝塔 元徳元年 大願主沙弥道蓮 比丘尼道性」の墨書がある。本堂、多宝塔ともに再建に多くの寄進をした道蓮、道性は、夫婦で尾道の海運に関わっていた人物わきじと考えられている。多宝塔は、三間二重塔で、本瓦葺きである。内部には大日如来及び脇侍（尾道市重要文化財）を安置し、彩色が施され、壁面には真言宗の名僧を描いた真言八祖像がある。多宝塔としては、規模が大きい上に全体のつりあいがよく、高野山こんこうざんまいいん金剛三昧院や石山寺いしやまでらの多宝塔と並ぶ優れた塔である。牡丹・唐草に蝶の透かし彫りをしたかえるまた 幕股等、華麗な装飾に富み、その整った容姿及び手法によって、鎌倉時代末期の代表的な建築とされる。昭和11年(1936)の解体修理で、屋根の上の相輪の中から経巻など多くの納入品が発見された。

3) 浄土寺阿弥陀堂（重要文化財）

阿弥陀堂は、本堂の東隣に位置し、南北朝時代、康永4年(貞和元、1345)再建である。寄棟造り、本瓦葺きで、正面等にはごうてんじょう 蔀戸が配置され、寝殿造りの要素も取り入れられている。内部は折り上げ格天井の格式ある内陣と「いしやま 卍崩し」の特徴的な装飾をもつ外陣に分けられている。本堂、多宝塔が再建された後に建てられたものであり、優れた和様建築と評価されている。本尊は阿弥陀如来坐像（広島県重要文化財）である。



浄土寺本堂（国宝）



浄土寺阿弥陀堂（重要文化財）



浄土寺多宝塔（国宝）

4) 山門（重要文化財）

山門は、南北朝時代(1333～1392)に再建された優れた建築である。本堂と同じ工匠の手によるものなのか、本堂向拝の軒の規矩と同じで、あまり時代の差がないと思われる。側面の妻の部分の板臺股に足利氏の家紋である「二引両」が表されている。

5) 庫裏及び客殿（重要文化財）

庫裏及び客殿は享保4年(1719)建立、方丈は元禄3年(1690)尾道の豪商である橋本家が施主となって再建された。どちらも年代が墨書された棟札が残存している。

6) 露滴庵（重要文化財）

露滴庵は、三疊台目の席に水屋と後補の勝手を付属させた茶室であり、豊臣秀吉が桃山城内に建てた茶室「燕庵」を移したものと伝えられ、文化11年(1814)向島の天満屋富島家が浄土寺に寄進している。

7) 唐門（重要文化財）

唐門は総ケヤキ造の小さな一間の向唐門で正徳2年(1712)建築、宝庫は2階建て土蔵で、宝暦9年(1759)建築である。裏門（重要文化財）は長屋門で18世紀後期の建築である。

このように浄土寺には、国宝、重要文化財をはじめ、多数の中世及び近世の建造物と伽藍配置が残されており、往時の尾道の歴史文化を今に伝える貴重な歴史遺産である。加えて、尾道水道を見下ろす位置にあり、素晴らしい歴史的景観を有する国宝の寺ではあるが、市民にとって気軽に立ち寄ることができる憩いの場となっている。

【活動】

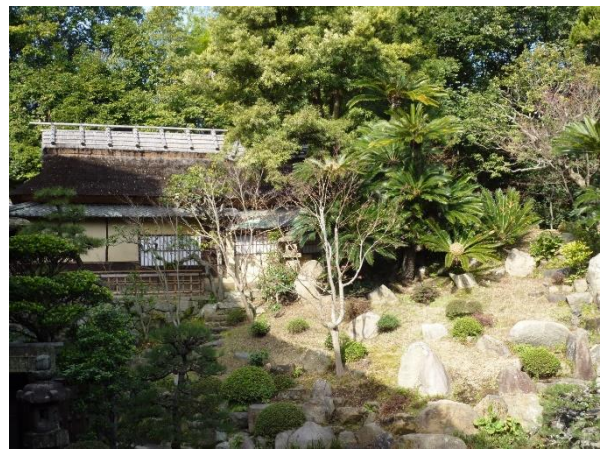
吉和太鼓おどり

浄土寺と関わりの深い歴史上の人物として、足利尊氏がいる。

建武3年(1336)、京都を追われた足利尊氏は、浄土寺で戦勝を祈願した（紙本墨書観世音法楽和歌(重要文化財)）。その後、湊川の合戦に大勝し室町幕府を開いた尊氏は、尾道の恩顧に応え、浄土寺利生塔を建立し鉄製燈籠(広島県重要文化財)。境内には尊氏供養塔といわれる宝篋印塔があつたり、寺紋が足利家の家紋であつたりと、足利家と関係の深い寺である。



浄土寺山門（重要文化財）



浄土寺庭園（名勝）と露滴庵（重要文化財）



浄土寺山門付近から尾道水道を望む。中世は参道（石段）の下付近まで海であった。

こうした足利家との深いつながりの浄土寺に奉納される儀礼に、吉和太鼓おどりがある。その始まりには諸説あるが、足利尊氏が尾道から九州に向かうとき、水先案内をつとめたのが吉和の漁師たちで、尊氏の戦勝を祝って踊ったのが、この勇壮活発なおどりであるとの説がある。

また、文化13年(1816)の亀山士綱『尾道志稿』によると「十八日近村吉和の漁人数百錦幟を持ち、一人鬼面をかつぎ、棒を振り、その後に数十艇太鼓を打ち、また黒木綿にて船の形をつくり、あとをしたい浄土寺観音に参詣する」とある。このおどりは古い伝統のあるもので、それぞれ先祖から、その役柄を世襲しているところに、その特徴がある。その昔吉和村に悪疫流行のとき浄土寺観音に祈誓し、その禍をまぬがれたので、その報恩感謝のおどりであると伝えている。

天明8年(1788)の『年誌帖』には、浄土寺へ吉和太鼓おどりが参拝していることが記載されている。また、浄土寺には、江戸時代に奉納された吉和太鼓踊懸絵馬がある。絵馬は、法橋永春によって描かれたもので、嘉永元年(1848)に奉納され、それを昭和3年(1928)に堀田翠峰が模写している。そこに書かれている由来記には、「足利家海上往来の節、吉和の漁民ども漕船御用に召出され」たことによると記載されている。



太鼓おどりの往時の賑わいを伝える絵馬

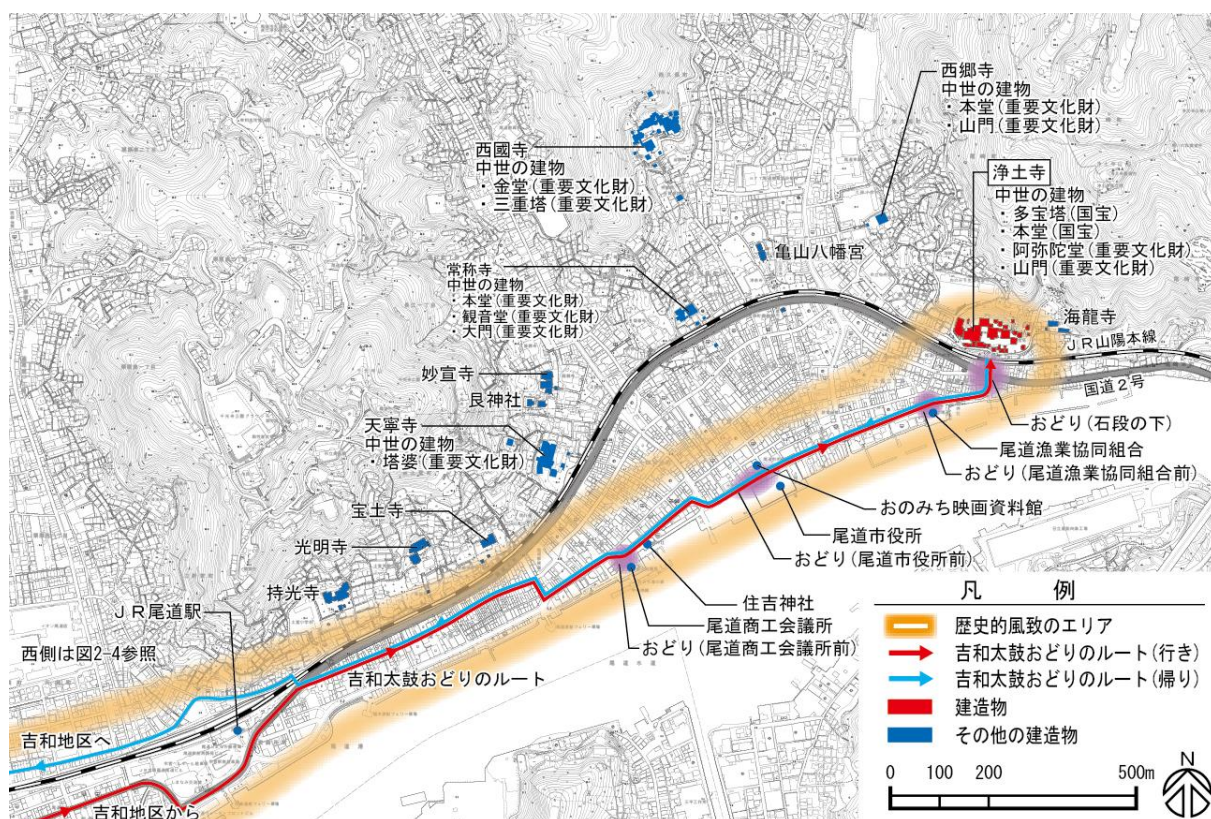


図 2-3 浄土寺と吉和太鼓おどりの歴史的風致エリア

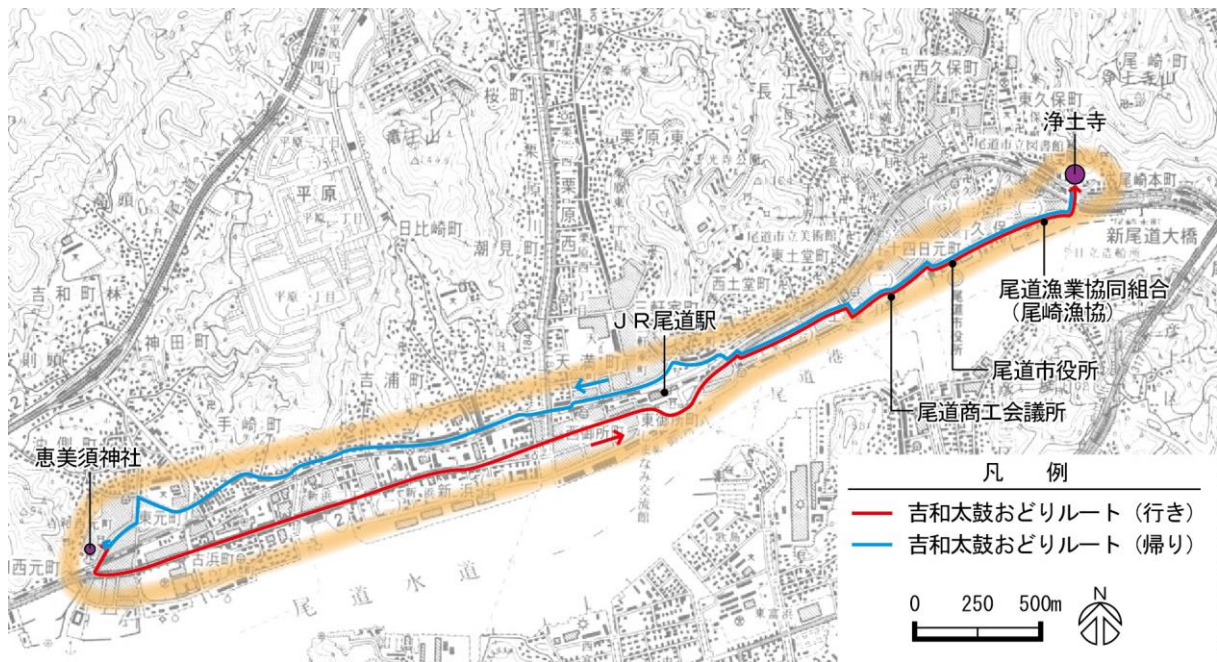


図 2-4 吉和太鼓おどりのルート

江戸時代以降、西暦偶数年の旧暦 7 月 18 日に浄土寺に奉納される儀礼となり、現在でも伝統が継承されており、「太鼓おどり」として広島県無形民俗文化財に指定されている。「おどり」、「船唄」、「狂言」の 3 つからなり、おどりは「おうど」と「かんこ」の 2 組で、「追い打ち」、「逃げ打ち」の古い型を伝えている。

百数十名の大行列で、^{さいりょう}宰領以下、太鼓方、小太鼓方、^{かねかた}鉦方、その他御船方、船唄、狂言の各役に分かれているが、太鼓と小太鼓とが中心となるため、「太鼓おどり」の名が付けられている。このおどりに参列するのは、吉和太鼓踊保存会のメンバーと吉和小学校・中学校の児童生徒である。観音像を乗せた船神輿「^{ふなみこし}観音丸」を先頭に、悪魔払いの赤鬼、青鬼、先払いのやっこ、かんこ方、おうど方の順で、吉和西元町の恵美須神社を出発し、浄土寺に向かう。「観音丸」は、尊氏御座船の型を許されたものと伝えられ、これを操るお船方は子孫相伝の役である。

行列は、恵美須神社を出発した後、尾道水道沿いの国道 2 号を進み、JR 尾道駅前を經由して、尾道本通り商店街と海岸通りを通る。そこには、港町としての尾道の風景が広がっている。

さらに、尾道商工会議所、住吉神社を通り、おのみち映画資料館（旧尾道港組問屋穀物倉庫）と市役所前までくると、ここで吉和太鼓おどりが披露される。その後、海岸通りを東に進み、尾道漁業協同組合を經由して浄土寺下まで練り歩く。



住吉神社



尾道漁業協同組合前での
太鼓おどりの奉納



おのみち映画資料館

元々、中世には海岸線が尾道商店街辺りであったこともあり、船で浄土寺まで往来していたことも推定され、近世には、西国街道（現在の尾道商店街）がルートとなっていて、近代になり、現在の海岸通りを進むようになっている。千光寺山麓の寺社は、西国街道に参道がつながり、中世寺院建築と近世の町並みが一体となった場所を吉和太鼓おどりの行列が進むこととなる。この名残を現代に残しつつ、行列は尾道水道沿いを進んでいるのである。



浄土寺石段を上る

こうした、古き港町の雰囲気醸し出している街並みの中を抜け、浄土寺の石段の下でおどりを演じた後、船神輿が石段を上がり、続いて一行は後ろ向きで石段を上がる。これは、敵の攻撃に備えるためだといわれている。



観音像を先頭に、参道の石段を登る

そして、本堂前で「エイ、エイ」とかけ声をかける勇壮な舟唄が奉納され、船神輿の観音像は本堂に安置される。その後、白装束の幸領方や赤鬼、青鬼の見守る中、吉和太鼓おどりが奉納される。大太鼓、小太鼓や鉦を鳴らしながら、勇壮に踊る。

浄土寺での奉納が終わると、行列は吉和西元町まで帰っていく。来たルートに戻り、JR 尾道駅東側から線路北側の道を進み、途中から旧西国街道を通して恵美須神社へ戻る。

このように、浄土寺をはじめとした中世寺院建築が点在する港町を横断して、吉和太鼓おどりは練り歩く。中世から現在に至る歴史の積み重なった港の歴史的街並みの中を中世の名残を残す荘厳な伝統行事として、吉和太鼓おどりが進み、浄土寺で奉納される。



昭和 30 年代の様子



浄土寺の石段を後ろ向きで登る



浄土寺の境内で奉納

【建造物】

西國寺は、尾道を代表する古刹の一つで、尾道商人の寄進を多数集めた寺でもあり、往時の繁栄を今に伝える。寺伝によれば奈良時代の天平年間（729～749）、行基が開基したとされる。

真言宗醍醐派大本山であり、下記の建造物の他、近世建築の本坊や持仏堂、大師堂、多数の美術工芸品等、尾道の歴史の一部が凝縮したともいえる寺院である。愛宕山の中腹から麓にかけて、斜面地を利用した伽藍配置は、港からの景観も素晴らしく、市民の敬愛を集めている。



西國寺金堂と三重塔（右上）
（ともに重要文化財）



西國寺三重塔（重要文化財）



西國寺仁王門
(広島県重要文化財)

図 2-5 西國寺の伽藍配置

※出典：「尾道西國寺の寺宝展」（広島県立歴史博物館）

1) 西國寺金堂（重要文化財）

金堂は、至徳3年(1386)の建立で、和様を基調とした建物である。昭和40年代の修理工事で棟札が発見されており、至徳3年の年号や大工等の名前が墨書されている。入母屋造り、本瓦葺き、五間六間の密教本堂、全体的に和様建築であり、側柱上が二手先で蛇腹支輪及び小天井付にし、向拝は三ッ斗組である。それに虹梁^{こうりょう}が掛けられ中供^{なかそなえ}に臺股^{たいばみ}があり、虹梁の柱外には挙鼻^{いりも}が、また主屋の方へは手挟^{てはさみ}が出て威厳が示されている。入母屋造^{やづくり}の妻飾^{つまかざり}は二重虹梁大瓶束^{にじゅうこうりょうたいへいづか}で、屋根に重量



尾道三山の一つ西国寺山の山腹に伽藍が広がる西國寺

感があり、規模壮大で雄健な堂々とした感じを与える。内部の厨子^{ずし}、須弥壇^{しゅみだん}も秀麗である。木造薬師如来坐像（重要文化財）が本尊である。

2) 西國寺三重塔（重要文化財）

三重塔は、永享元年(1429)足利義教によって建立された。室町時代によく行われた復古建築の純和様で、和様と禅宗様の混交の風に飽き足らず、奈良時代への復帰をめざしたものである。三間三重塔のどっしりとした美しい塔で、回縁がなく、石製基壇の上に立つ珍しい遺例である。永享元年の西國寺塔婆勸進帳（重要文化財）は、將軍足利義教や備後守護山名氏など、有力者の名前が記載された三重塔建立の証となる文書である。

3) 西國寺仁王門（広島県重要文化財）

仁王門は、江戸時代の慶安元年(1648)の建立である。県内で数少ない楼門形式の仁王門で、建立年代からは比較的古い様式でまとめられた、格調の高い建物である。棟札によると、元文5年(1740)の修復では、尾道の豪商・泉屋新助を施主に、大工を藤原五良兵衛として、大工194人、屋根葺き職人21人、人夫191人、合力人夫212人が従事し、瓦2800枚を追加したことが知られている。門の両側には、寺のシンボルともいえる大きな草履がかけられている。

【活動】

ア 柴燈護摩

西國寺では、毎年1月8日、新春恒例の「柴燈護摩」が行われる。

柴燈護摩は、修験者が修行で山に登った際、薪や木の枝（柴）等を焚いて護摩修行したというところから起こったといわれている。また、護摩とは、不動明王等の前に壇を築き、火炉を設けての木等を燃やし、煩惱を焼き尽くし、合わせて息災祈願を行うことである。家内安全、商売繁盛等を願って、元日から行われる「吉祥護摩修行^{きつしょうごまじゆぎょう}」の結願となる法要であり、古くから行われている仏教行事である。

護摩行については、西國寺文書に方法等を記載した史料が残っており、寛永8年(1631)の「不動護摩私記^{ふどうごましき}」や江戸時代中期の「不動護摩次第^{ふどうごましだい}」により、江戸時代には行われていたことが分かる。ただし、護摩行は真言宗で古くから行われている修行であり、西國寺でも中世あるいはそれ以前から行われていたと考えられる。



柴燈護摩（火渡り神事）

西國寺の柴燈護摩では、読経が響く中、山伏姿の僧侶が矢を放ち、境内に設けられた護摩壇に点火し、信者らの願いが書かれた護摩木を次々と投げ入れ、僧侶らが燃えさかる火の中を、般若心経を唱えながら渡る。

続いて、火渡り神事が行われる。焼け落ちた護摩壇をならして「火の道」をつくり、見守っていた鉢巻き姿の信者らが素足になって、まだ火が残る灰の上を歩く。

周囲に置かれた檜^{ひのき}の枝葉がいぶされ、独特の香りと煙で辺りを包み、神事の雰囲気を高める。この独特の香りは、西國寺周辺の街並みにも広がっている。

この神事には、西國寺が真言宗醍醐派の大本山であることから、他の寺からも参列のため僧侶が多数訪れる。また、新春の尾道を代表する行事でもあり、信者だけでなく多くの市民や観光客が訪れ、無病息災や繁盛を願う。



西國寺の柴燈護摩（火渡り神事）

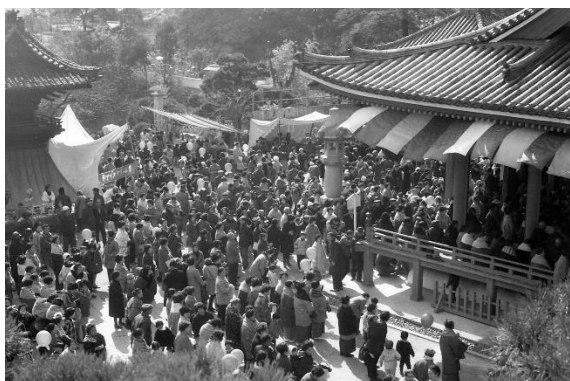
イ せつぶんえ 節分会

節分は立春の前日を指すが、西國寺では、毎年2月3日に金堂を舞台として、節分会が行われる。西國寺の節分会は、市内最大級のもので、護摩をたく法要の後に、その年の福男・福女（年男・年女）が金堂から境内の聴衆に、「鬼は外、福は内」の掛け声とともに豆や菓子、福札を投げる。

節分会は、古来より星祭として、法要が行われていたものが、戦後に現在の形となったとされる。星祭は、一年の災いをなくすために、各人に定められた本命星や当年星などの諸星を祀る法要のことで、一年の始まりの節目である節分に行われる。少なくとも昭和30年代には、境内に多くの市民が集う現在の形になっている。

節分会で拾った豆などを、市民は家に持ち帰り、その年の無病息災や家内安全を祈り、共有するのである。

これらの正月や節分に行われる伝統行事は、中近世の寺院建築の中で、市民の信仰や祈りとともに、尾道の風物詩として行われている。



昭和30年代の節分会

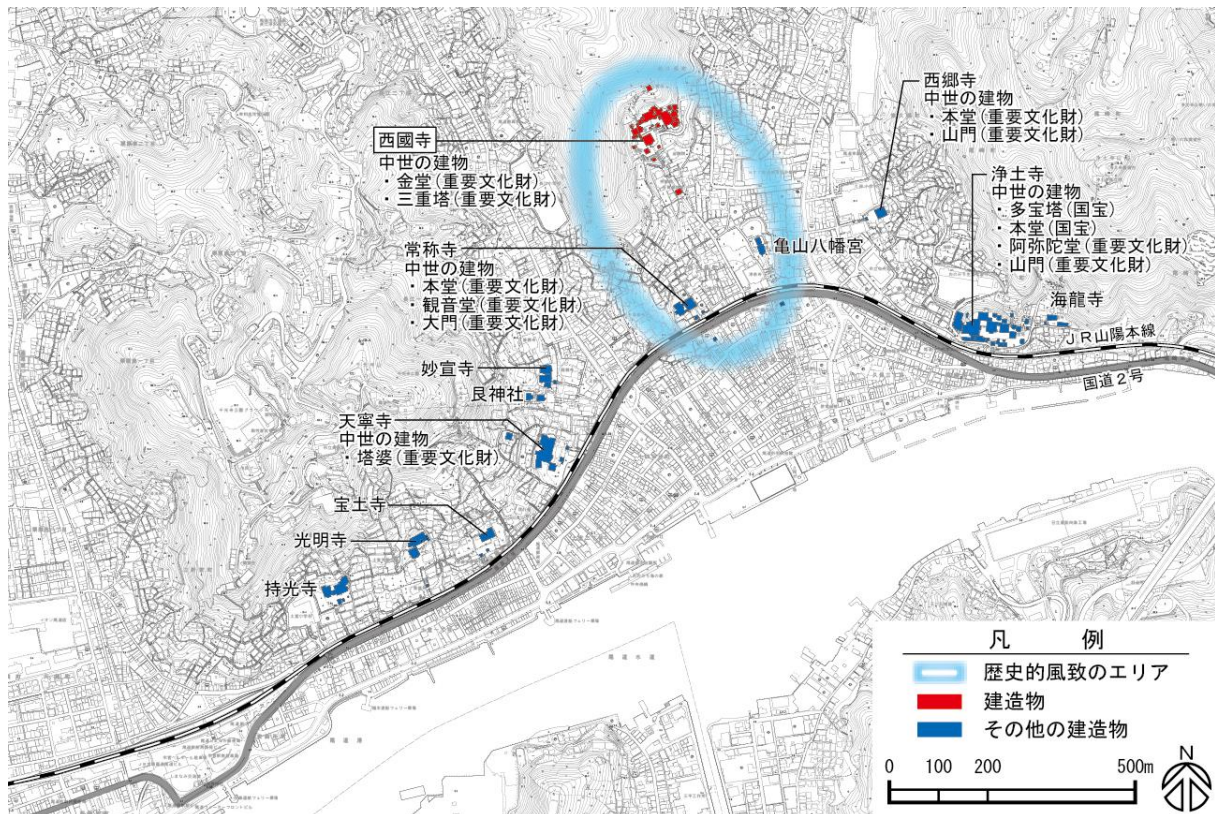


図 2-6 西國寺と紫燈護摩、節分会の歴史的風致エリア

まとめ

中世の尾道は、平安時代末の開港以来、瀬戸内海を代表する港町へと発展し、武家や商人たちによって、多くの寺社仏閣が整備されてきた。

中世に開基され、その時代の建造物を有する寺院として浄土寺や西國寺、天寧寺、西郷寺、常称寺がある。さらに、建造物は江戸時代に建て替えられているが、持光寺、光明寺、宝土寺、妙宣寺、海龍寺などもあり、それぞれ千光寺山、浄土寺山麓に位置を変えず、現存している。また、良神社や亀山八幡宮などの神社も中世に遡ることが『尾道志稿』(文政8年(1825))に記載されている。

中世遺跡である尾道遺跡の発掘調査によって、中世段階の海岸線が現在の尾道商店街辺りであることが判明しており、これらの寺社は中世の海岸線に沿って配置されていることが分かる。よって、吉和太鼓おどりの船を使用して尾道水道の海岸線沿いに浄土寺まで進んできていたことも考えられ、中世の港町の景観や現在の歴史的風致とその形成過程を考えるうえで、こうした寺社は重要な要素を含んでいる。

尾道遺跡を含む市街地では、吉和太鼓おどりのように、足利将軍家との歴史に由来しつつも、漁師町から出発して中世からの港町の街並みを練り歩き、歴史的建造物の前で太鼓おどりを奉納するものや、西國寺柴燈護摩や節分会のように境内地において護摩行を行い、一般にも開放しつつ、古式の伝統行事を行っているものが、祈りの場、生活の場と一体になって継承されている。

加えて、吉和太鼓おどりは、尾道水道を間近で感じるルートや奉納される浄土寺に加え、背景となる坂のまち(斜面市街地)とそこに点在する寺社群、山並みが相まって、尾道らしさを感じる祭礼行事でもある。

柴燈護摩や節分会は、信者や観光客を通じ、また、立ち上る煙や薫りから、西國寺の境内を超えて祭礼行事が行われていることをうかがい知ることになり、風物詩としての風情をもたらしている。

このように、尾道水道に面する中世寺院をはじめとした数多くの歴史的建造物、そして、それらが立地し歴史が重層する市街地（生活の場）を舞台や背景として、中世にその起源をもつ祭礼行事が行われ、継承されてきたことで、中世から続く港町尾道の歴史的風致が形成されている。

コラム：浄土寺や西國寺とつながる寺院群～古寺めぐりコース～

吉和太鼓おどりや柴燈護摩、節分会を見学・体験した人々のうち、特に来訪者は古寺めぐりコースを通じて他の寺院等に足を運ぶ者も多い。また、これら行事以外のときにも、浄土寺、西國寺のみならず、多数の寺院等をめぐることが尾道の魅力の一つであり、重要な観光資源となっている。

浄土寺や西國寺と同様に、開基が中世にさかのぼる寺院を紹介する。

西郷寺は、時宗じしゅう託阿上たくあしょうにん人によって開基され、文和2年(1353)建立の本堂（重要文化財）は、最古の時宗寺院本堂として貴重な遺構である。また、西郷寺には足利尊氏から院号や本尊である念持仏（木造阿弥陀三尊像（尾道市重要文化財））をもらい受けたと伝わっている。

常称寺は、後で述べる祇園祭と深いつながりのある古刹で、本堂・観音堂・大門（重要文化財）は室町時代の建築である。本堂の阿弥陀如来立像（尾道市重要文化財）は創建当時のものと考えられ、須弥壇しゅみだん（重要文化財）には貞治5年(1366)の墨書がみられる。三体みこし神輿の祇園社はこの常称寺境内にあり、宝暦6年(1756)の常称寺絵図には、祇園社や鳥居の位置が明記されている。

天寧寺は、2代将軍足利義詮により、貞治6年(1367)に壮大な伽藍が建立されている。さらに、嘉慶2年(1388)には、天寧寺塔婆（重要文化財）が五重塔として建立されている。

天寧寺は、浄土寺同様に足利家ゆかりの寺となり、康応元年(1389)の今川了俊が書いた『鹿苑院殿ろくおんいんどの厳島詣いつくしまもうで記』には、3代将軍足利義満が天寧寺に宿泊したことが書かれている。

（２）近世尾道の港町文化にみる歴史的風致

はじめに

中世の尾道は、長江・十四日^{とよひ}と久保に２つの入り江があり、入り江を中心に港町が形成された。尾道遺跡の発掘調査により、現在の尾道本通り辺りがかつて海岸線であったことが判明しており、この海岸線に沿って長江・久保といった自然の港湾施設を有した小集落が点在していた。これらの集落は斜面地に位置していた寺社と小路で結ばれており、商業が繁栄するにつれ、港も少しずつ埋め立てられ、拡大していった。

このように、斜面地に寺社、海岸線に沿って点在する小集落、両者をつなぐ小路という景観は、江戸時代に入り確立した街道と新たな海路である西廻り航路によって大きく変化することとなる。

江戸時代に新たに確立した街道としては、先ず近世山陽道（以下「西国街道^{さいごくかいどう}」という。）をあげることができる。この道は、現在の尾道本通りである。防地峠^{ぼうちとうげ}を越えて、広島藩領に入るとそのまま南下し、爽籟軒庭園^{そうらいけん}がある辺りで西へ大きく曲がり、常称寺前^{じょうしょうじ}と尾道郵便局前^{かぎじょう}では鉤状に折れ曲がっている。尾道本通りの発掘調査では何層にも積み重なった整地層が見つかっており、出土遺物から 15 世紀～16 世紀には道があったと推定でき、街道として利用される以前から尾道の主要な道であったと考えられる。こうして、かつての山陽道が山沿いを走っていたのに対し、西国街道は海岸に沿って設けられると、寛永 10 年(1633)、幕府巡検使の巡察のとき、尾道は公式の宿駅に指定された。

一方、同じ頃、石見国大森と結ばれた銀山街道が確立した。銀山街道とは産出した銀を幕府へ上納するための街道を指すが、特にこの道は出雲街道とよばれている。尾道を終着点とした出雲街道は石見銀山がある大森から尾道までの約 130km の道程で、旧暦 10 月下旬～11 月初旬にかけて 3 泊 4 日で銀を運び、尾道から大坂へ積み出していた。石見銀が到着する日は、町奉行や本陣笠岡屋をはじめ町中が警備や馳走^{ちそう}の準備に大忙しであった様子が文書に残っている。この出雲街道は、現在の長江を通り、御袖天満宮参道^{みそでんまんぐう}と交わる場所で鉤状に折れ曲がり、そして、西国街道と交差する。長江は、街道の交差する場所であり、街道沿いには商家が建ち並び、繁栄した。



出雲街道石標（出雲大社道）を伝える石標

また、西国街道に参道がつながる寺社として、持光寺や光明寺^{こうみょうじ}、正念寺^{しょうねんじ}、尊光寺^{そんこうじ}、熊野神社^{くまのじんしゃ}などが、出雲街道に参道がつながる寺社としては御袖天満宮の他に、福善寺^{ふくぜんじ}、正授院^{しょうじゅいん}、慈観寺^{じかんじ}などが立地し、歴史的な風情を醸し出している。

もうひとつ画期となったのが、寛文年間(1661～1673)の河村瑞賢^{かわむらすいけん}による北前船^{きたまえぶね}の西廻り航路の開発である。以前までは、東北・北陸方面の領主米は陸路を使つての輸送が主であったが、これにより日本海から瀬戸内海を通過して大坂へ至るルートが確立し、一度に大量の米を容易に廻漕できるようになった。これが日本海や瀬戸内海沿岸部の都市の発展につながるのであるが、尾道でも多くの廻船が就航するようになり、港湾整備も進んだ。元文 5 年(1740)、平山角左衛門^{ひらやまかくざゑもん}が町奉行に就任すると住吉浜の築造を行い、荷揚場が新たに造られると、ここが商業の中心地として栄えることとなった。港には周辺地域からの物資が集積し、特に畳表や塩、綿製品等の特産品が全国へ運ばれた。

こうした町の発展に伴い海側に土地が拡張されていたことは発掘調査からも確認でき、

江戸時代には大規模な工事が進められていたようである。現在の久保二丁目付近は橋本新開と呼ばれ、豪商橋本氏により、江戸時代中～後期に大規模な埋立工事が行われている。陸地が広がると、今度は西国街道と海をつなぐ小路が新たに設けられた。

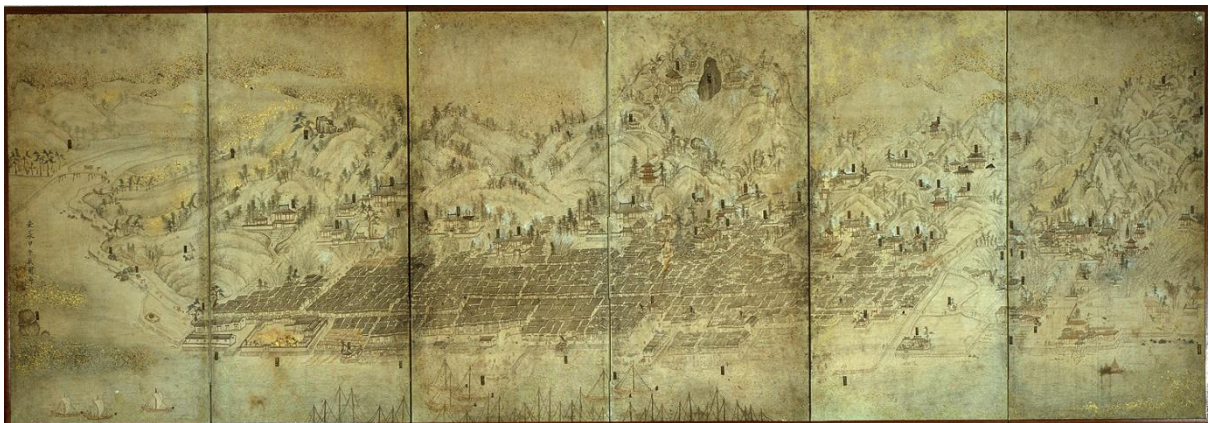
このように、西国街道が東西に、出雲街道が南北に尾道を貫通すると、この街道沿いに街並みが形成された。また西廻り航路の開発は尾道の港湾整備を促進し、陸地の拡大と併せて経済活動の空間が拡充され、多くの人や物資を受け入れられるようになった。こうして、斜面地は寺社が点在する宗教的空間、平地は人々が利用する都市的空間として区別され、西国街道を中心に斜面地と海をつなぐいくつもの小路がつくられ、現在に通じる尾道の街並みが形成されたのである。現在の町割、取り分け小路と呼ばれる道は、多くが近世から引き継がれたものである。

こうした小路の名称は、江戸時代初期から史料にみられ、元禄5年(1692)の検地帳や文政4年(1821)の尾道町絵図等に「水尾小路」や「今蔵(倉)小路」等が記されている。また、「今蔵(倉)小路」や「小川小路」等、豪商の名前に由来している小路もある。加えて、職人も多く住んでいたこともあり、鍛冶屋町や石屋町といった町名もみられる。

この他、尾道市では、これら歴史的な小路の名称以外にも、「タイル小路」や「古寺めぐりコース」等、現代において名称づけした小路・通りもあるが、これらの小路・通りも、多くは近世等につくられた歴史的な道である。このことは、絹本著色尾道絵屏風(尾道市重要文化財)も示しており、現在の旧市街地の範囲と町割は、斜面地の住宅地を除けば、ほぼ江戸時代と重なる。

また、江戸時代の港町尾道の後背地であった千光寺山斜面地には、大正時代以降、文人の志賀直哉や歌人の中村憲吉が暮らした旧居、旧福井家住宅主屋・茶室・土蔵(登録有形文化財)、旅館であったみはらし亭(登録有形文化財)、西側には和洋折衷住宅群などが立地し、歴史が重層する尾道を体感することができる。

このように、港町尾道は、江戸時代における主要な街道の整備と北前船をはじめとする多くの廻船の寄港、それに伴う港湾整備などにより、瀬戸内有数の商業都市として発展し、問屋業、製造業などを中心に多くの尾道商人が生まれた。そして、商人たちは、その信仰により多くの寺社に寄進を行い、これらの寺社では、町の生活と一体となった様々な祭礼行事が生まれた。尾道の夏を代表する祇園祭や天神祭、住吉祭はその代表例といえる。



絹本著色尾道絵屏風(安永3年の尾道)

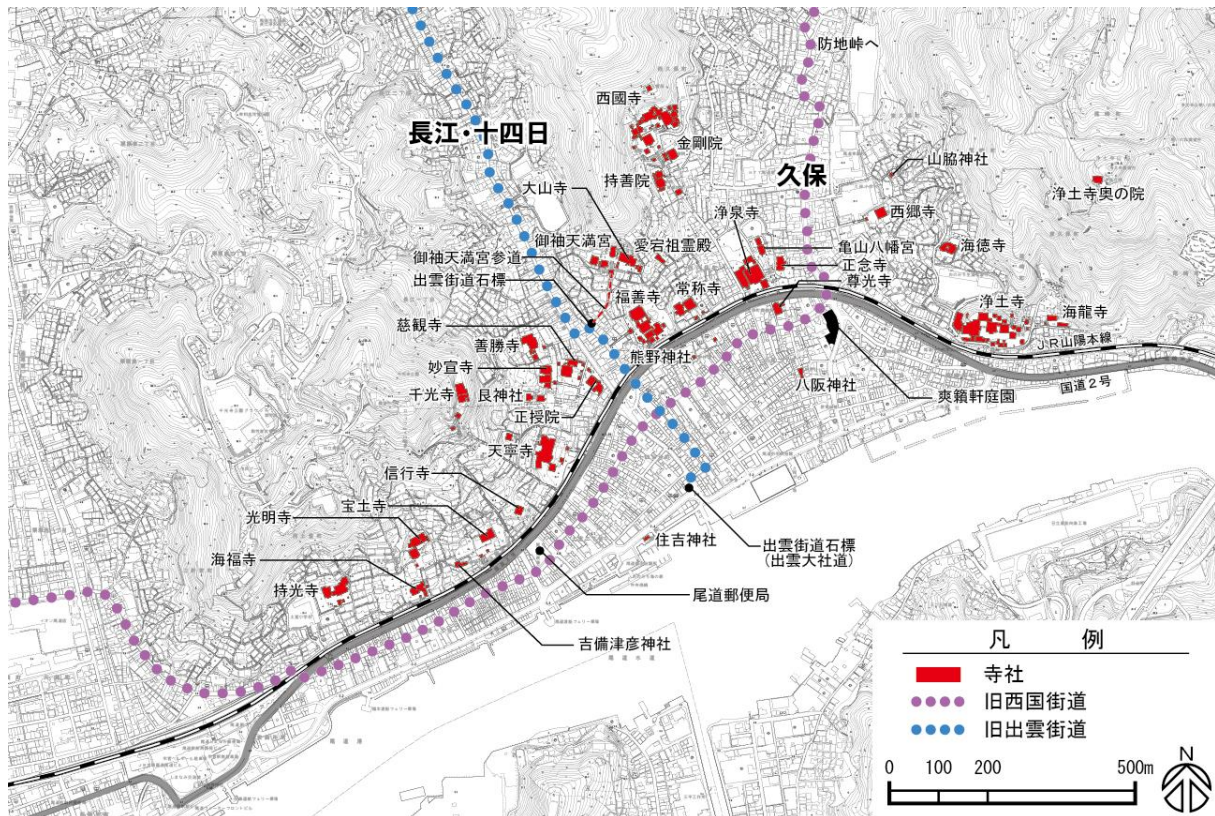
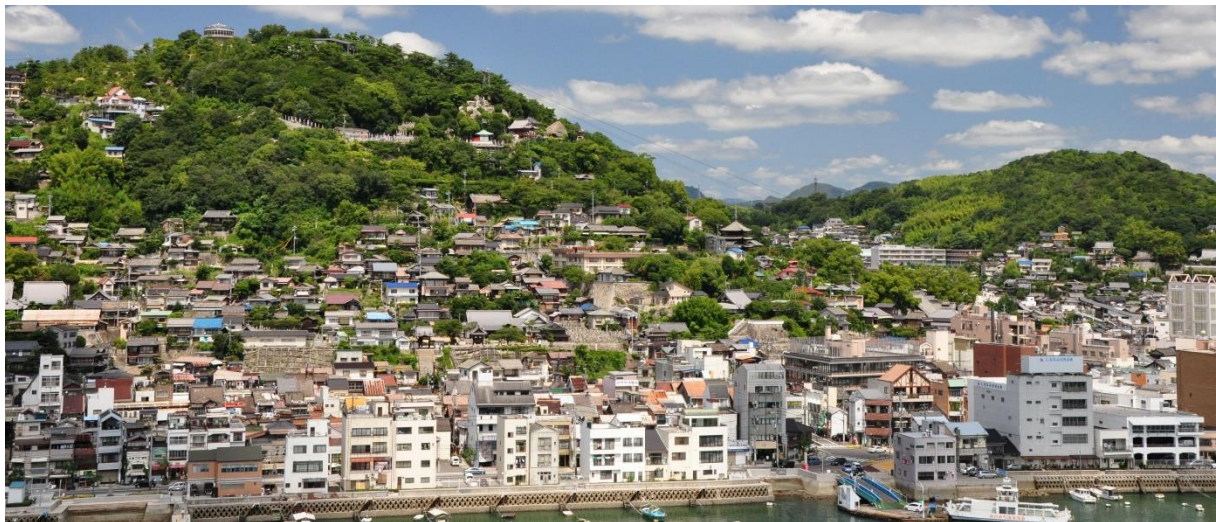


図 2-7 尾道の主な寺社



向島から見た尾道。左手が千光寺山、右手が西国寺山。斜面地には多数の寺社が位置する

①八阪神社と祇園祭

【建造物】

ア 八阪神社（祇園社）

尾道市久保二丁目の厳島神社に合祀されている八阪神社（祇園社）は、時宗2代目遊行他阿真教上人が開基した西久保町の常称寺境内にあった。もとは御調郡の産土神として崇敬をうけたが、承応4年(1655)春に尾道をはじめ諸国に疾病が流行した際、鞆津祇園神社の神霊をうけて立願し、神輿一体※¹を造って大門前にお旅所をつくり、旧暦6月7日から14日まで祈願祭礼を行った。

文政12年(1829)の常称寺文書「文政十二年入院已後浄財喜捨撮用日記」によれば、明暦4年(1658)拝殿・神楽殿を建立し、明和元年(1764)に本殿を再建、寛政5年(1793)拝殿が再建されている。常称寺に祇園社があった名残として、常称寺大門（重要文化財）には、天保7年(1836)改修の際、大棟に大きな巴瓦が6枚つけられ、現在も残っている。

祭神は素盞鳴尊、稲田宮須賀八耳命、櫛稲田比女命の三柱。明治元年(1868)の神仏分離で翌2年6月、同社と御袖天満宮が最初にひきわけられ、厳島神社に移されている。また、享保元年(1716)に広島藩主浅野吉長より寄進された石鳥居が八幡神社に移され、二の鳥居として山陽線北側境内に残っている。

現在の拝殿は18世紀後半の建築（広島大学名誉教授三浦正幸氏調査所見）で、軒唐破風造の向拝を付けた入母屋造となっている。狛犬は県内でも最大級で、文政4年(1821)と天保8年(1837)につくられており、かんざし灯籠は文政10年(1827)に建てられている（いずれも刻銘）。



八阪神社の社殿



かんざし灯籠

イ 常称寺

常称寺本堂は、15世紀前期の建築で、桁行5間、梁間6間の規模で、入母屋造、平入、本瓦葺きである（『常称寺建造物調査報告書2005』）。本堂の規模や天井が高いことは、常称寺の格式の高さを示すものと考えられる。

観音堂は、15世紀末～16世紀中期の建築で、宝形造、本瓦葺きである。宝暦6年(1756)の常称寺境内絵図では、本堂正面の東側に確認できるが、大正4年(1915)以降に現在の場所に移築さ



常称寺本堂（重要文化財）

※1 神輿一体

本来、神輿の数え方は「基」だが、尾道の祇園祭では、三体神輿というように「体」を使用している。天明5年の「役用年誌帖」に、「常称寺エ御還御被遊候之三体共・・・」とあり、江戸時代から三体と呼称されていることから、「体」を単位とする。

れたと考えられる。

鐘撞堂^{かねつきどう}は、17 世紀中期の建築で、入母屋造、
棧瓦葺きである。

常称寺大門は、14 世紀末期の建築で、四脚門、
切妻造、本瓦葺きである。大門の大棟には、天保
7 年(1836)に大きな巴瓦が 6 枚、町年寄から寄
進され取り付けられている。常称寺境内にあっ
た祇園社の本門として位置づけられたためであ
る。

常称寺大門前は、鉤型^{かぎがた}の交差点であり、中近世
の街並みや地割りの名残である。道が鉤型になって
いることは、中近世の街並みにみられるように、
敵の侵入(直進)を防ぐことや見通しを悪くし、防
御を有利にするための手法である。



常称寺大門（重要文化財）

ウ 正念寺

正念寺は、天正 2 年(1574)の開基とされ、本堂
と庫裏は 17 世紀代に建立された(『広島県近世
社寺建築緊急調査報告書 昭和 57 年(1982)』)。
本堂天井には、近世の尾道商人等により寄進さ
れた 144 枚の彩色画(尾道市民俗文化財)があ
り、弘化 3 年(1846)の銘がみられる。



正念寺本堂（17 世紀の建築）

【活動】

祇園祭

明暦 4 年(1658)に三体神輿をつくり祭礼が行われたが、
寛文 7 年(1667)に悪疫が流行し、神域が拡張された頃から
社人と僧侶のいさかいがあり、尾道に大火があった元禄
16 年(1703)までの 32 年間、御幸は中断されたと文化 12
年(1815)の常称寺文書にある。

天明 2 年(1782)の橋本家文書「祇園神輿御幸御通筋作法
之事」に当時の神輿のルートが記載されており、祇園社が
あった常称寺を出た三体の神輿が、町内を練り歩き、築島^{つきしま}、
薬師堂浜^{こうしんどう}、荒神堂浜でそれぞれ神輿を回している様子が見
てとれる。

祇園祭が盛んになったのは江戸文化の開花を迎えた宝
永年中(1704~1711)からといわれる。祭礼の始めと終りの
両日は早朝から久保、十四日、土堂の三町にちなむ三体神



三体神輿（三つ巴）

輿ならびにチャンギリ等が繰り出し、東西両浜と築島、尾崎、御所の 5 箇所にあらかじ
めたてられている幟^{かめやましこう}に向い、これを独占しようと激しい突進がつづけられ、最後には海
中に入るなど勇壮な祭りである。これを見ようと昔は、陸上はおろか船からも見物客が
あり、御旅所^{おのみちしこう}にあてられた西御所では夜店や奉納演芸等も繰り出し、道は参詣の群集で
埋め尽くされていた。

文化 13 年(1816)の亀山士綱著『尾道志稿』には、「三体の神輿をもて先後を争い廻し
場、常称寺内、薬師堂浜、荒神堂浜、御旅所、一本の幟の側を廻ること渦のごとく、足強

にして押出すをもて勝とす。」とあり、三体廻しの勇壮な様子がみてとれる。

こうした祇園祭は、元々旧暦6月の祭礼行事として記録があり、現在では、6月下旬の土日に開催される。祇園祭は全国各地にあるが、尾道の祇園祭は、近世の記録からも三体の神輿渡御が中心であり、神輿渡御絵図を見ても、その壮大なさまと町民一体となった様子がみてとれる。神輿などの準備も氏子などにより、事前に行われ、町には注連飾りなどがはられ、町全体が祭礼の雰囲気包まれる。

現在は、三体神輿は一つ巴が久保、二つ巴が十四日、三つ巴が御所（土堂）であり、各地区の町民が自分の地区の神輿を担ぎ、常称寺の住職が読経し、それから町中を練り歩く。

神輿は、約 350 kgもある明治時代のもので、「ヨイヤサーノ、ヨイヤサッ」と掛け声を上げながら練り歩く。その後、渡場まで神輿は進み、他の神輿と合流して三体廻しが行われる。三体廻しは、爆竹を合図に、幟の周りを一斉に駆け回る勇壮なもので、祇園祭の熱気もここがピークとなる。この様子は、明治40年頃の写真をみても、数多くの観客が祭りを楽しんでいる様子がうかがえ、現在でも、市民をはじめとして、多くの観客があり、町全体が活気づく祭礼行事である。

このように、寺社の参道や商家の間をぬける入り組んだ小路、尾道水道沿いを舞台に、尾道水道や斜面地等の景観に包まれながら、伝統と勇壮さが尾道の夏を彩る。



現在の祇園祭（三体廻し）



明治40年頃の祇園祭（三体廻し）



明治40年頃の祇園祭



戦後の祇園祭

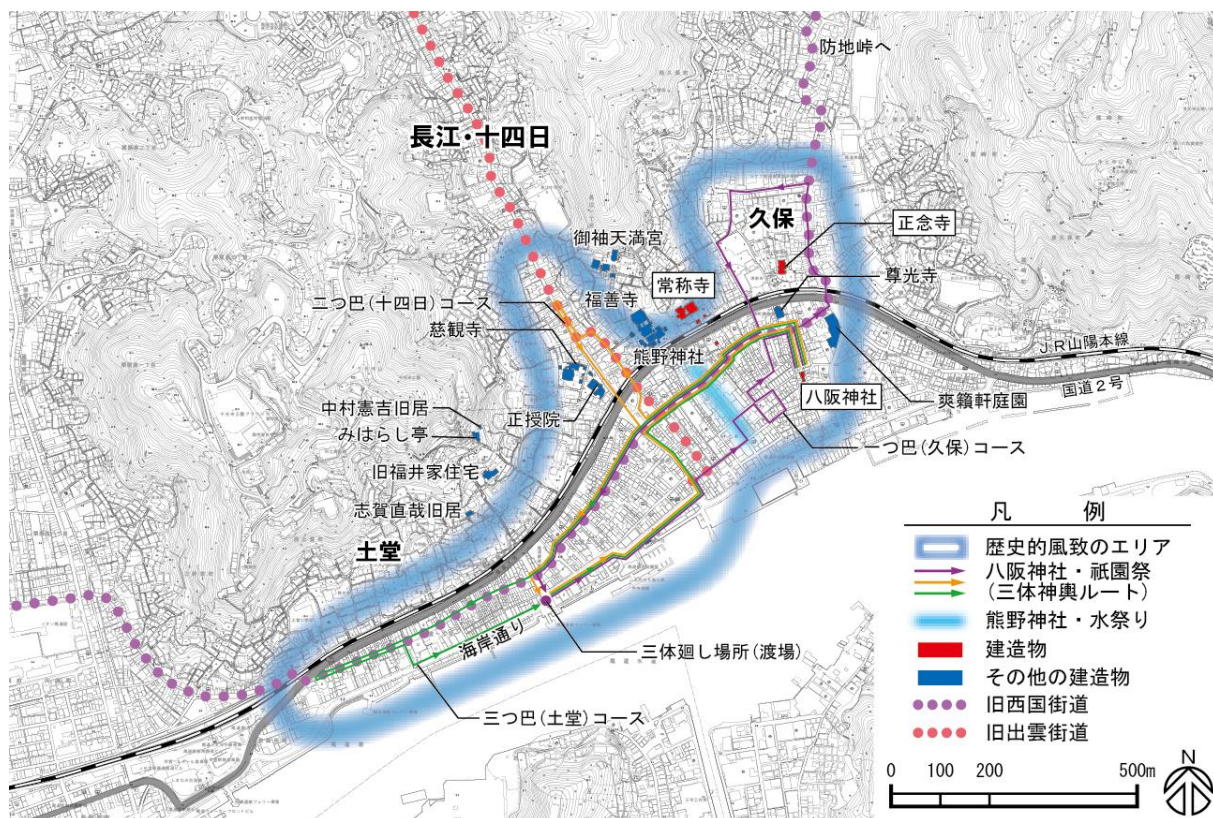


図 2-8 八阪神社と祇園祭の歴史的風致エリア

②御袖天満宮と天神祭

【建造物】

ア 御袖天満宮

延喜元年(901)、菅原道真が大宰府へ向かう途で尾道に船を寄せた。その時、この地の人々による歓待に感銘を受けた道真が、自らの衣の袖に自身の画像を描き、授けたという。その後、延久年間(1069～1074)に地元の人々は、授かった御袖を御神体として祠を建立したことから、御袖天満宮の名がついたとされる。

社殿は、慶長11年(1606)と貞享4年(1687)に造営があり、さらに、寛政11年(1799)と嘉永2年(1849)に修復されている。

昭和48年(1973)に火災に遭い、昭和50年(1975)に再建されたのが現在の本殿である。全国1万余社の天満宮の中で、菅公聖跡^{かんこうせいせき}25拝所の一つでもある。

この他境内には、火災に遭わなかった随神門等がある。

随神門は、享保年間(1716～1736)の建築(『広島県近世社寺建築緊急調査報告書』1985)であり、両袖の張りを押さえた入母屋造の三間一戸の八脚門で、左右に随神(神を守る隨身[警護する者]の姿の像)が安置されている。

また、随神門から本殿に向かって上がる55段の石段は、江戸時代につくられたもので、約5mの幅の1本石が54段つながり、最も上の石段はわざと2本の石をつないでいる。尾道石工の技術そして向上心とユーモアに富んだ性格を今に伝えている。



御袖天満宮

この石段は、大林宣彦^{※2}監督の映画「転校生」のロケ地の一つで、主人公の男の子と女の子が転げ落ち、男女が入れ替わるという象徴的なシーンを撮影した場所であり、ロケ地めぐり等の観光地にもなっている。

イ 福善寺

福善寺は、寛永7年(1630)に現在の地に移転し、浄土真宗本願寺派の直参末寺となった。現在の伽藍は、江戸時代後期～末期に建立(『広島県近世社寺建築緊急調査報告書』1985)され、特に山門は、龍の彫り物等が施された豪壮な門で、尾道の名物の一つである。また、境内地全体が中世の山城である丹花城跡^{たんかじょうあと}に含まれ、墓地には、丹花城主の墓とされる巨大な五輪塔2基(尾道市重要文化財)がある。



福善寺の山門

その他、福善寺の前側には、江戸後期～明治時代に建てられた商家が建ち並ぶ。写真(右下)の旧出雲街道沿いの商家は、江戸時代後期～明治前期の建築(『尾道市歴史的建造物及び町並み調査報告書』2009)で、切妻平入、木造2階建てである。塗籠漆喰^{ぬりごめしっくい}で虫籠窓^{むしごまど}がつく。この周辺でも代表的な建造物である。



福善寺前の旧出雲街道に面する商家

【活動】

天神祭

御袖天満宮で菅原道真の命日である旧暦6月25日に行われるのが天神祭であり、近代までは、神輿^{てんびん}が出て、その前を各町内の天嬪^{てんぴん}が競い合うように歩いていた。天嬪とは、祭りの先頭にあり、棒に木製の箱形の作り物とその上に「金時に熊」や「牛若丸」、「弁慶」等の作り物をつけたものである。天神祭は、全国各地の天満宮で行われる祭礼で、尾道の天神祭も町内を練り歩く神輿渡御や神輿還幸の儀などが氏子や町民の協力のもと、行われる。

現在では、7月中旬の金土日の3日間で行われる。1日目は、神輿の巡幸が行われ、御袖天満宮から福善寺、尾道水道沿岸の中浜通りなどをまわる。2日目は勧学祭、福引大会、大道芸等が行われる。3日目は神輿渡御で、御旅所から長江通り、尾道商店街、渡場、市役所、水尾町^{みのおちよう}などをまわり、最後に前述の映画「転校生」の階段落ちで有名な石段を、神輿が上り下りする「勇壮五十五段大神輿還幸の儀」が行われる。

神輿は、明治2年(1869)に製作奉納された450kgもある巡行神輿である。

天明5年(1785)の『役用年誌帖』では、天満宮での神輿^{みこしぎょうこう}御幸に警護をつけてほしいとの嘆願が寄せられており、すでにこの頃には、天神祭が行われていた。

また、橋本家文書『十四日町年誌』(文化11年(1814))によると、神輿が民家の軒にぶつかり、屋根が壊れたという記載がみられることから、江戸時代後期には、祭りの形態ができあがっていたと考えられる。

※2 大林宣彦

尾道出身の映画監督。同監督の作品である尾道を舞台とした「転校生」(1982年)、「時をかける少女」(1983年)、「さびしんぼう」(1985年)は「尾道三部作」といわれる。また、その後撮られた「ふたり」(1991年)、「あした」(1995年)、「あの、夏の日」(1999年)は「新尾道三部作」といわれる。

神輿の渡御^{とぎよ}のルートは旧市街地の中央部付近をめぐることになり、特に、旧出雲街道や米場町通り、中浜通りなど、江戸時代からの街並みの中を練り歩く。そこには、多くの市民や観客もついて回り、最後の石段や境内では大いに活気づく。

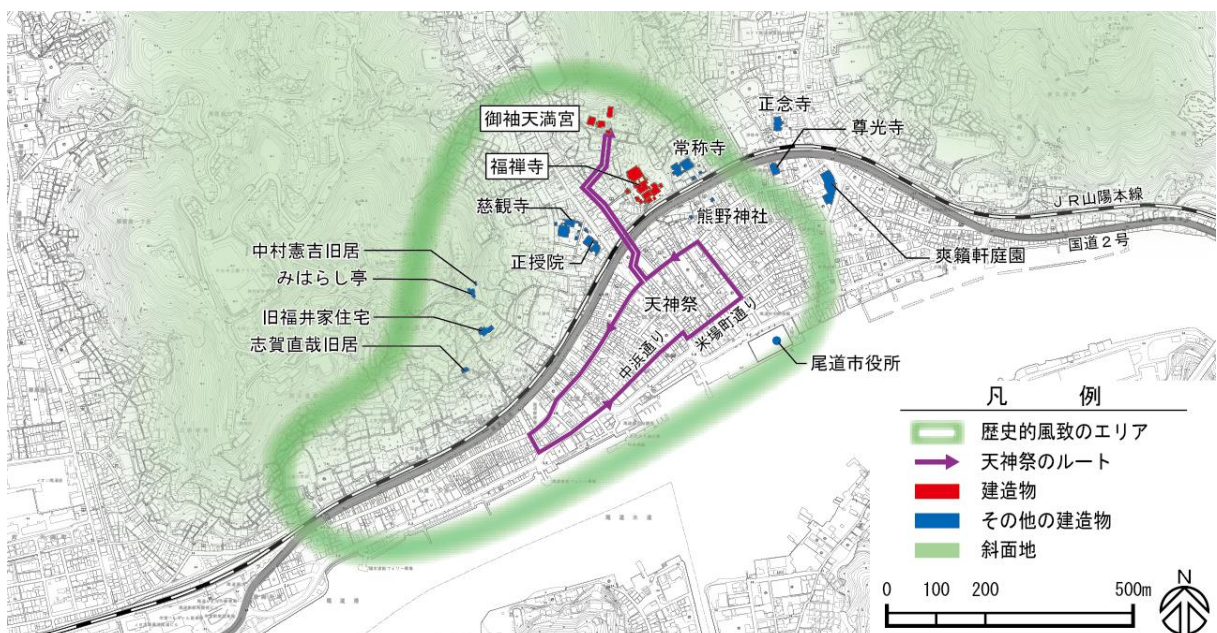
とりわけ御袖天満宮の天神祭の舞台となる斜面地では、中近世の寺社とともに、文人が過ごした住まい等数多くの戦前の住宅も立地し、坂と路地（小路）と尾道水道を見下ろす立地とが相まって、尾道のイメージを凝縮して体感することができる。加えて、天神祭では、旧西国街道や旧出雲街道といった江戸時代から続く通りも練り歩くのである。さらに、参道の石段を駆け上がる活気と勇壮さに満ちた姿は、この祭の最大の見せ場であり、坂のまち・尾道をより印象づける。



昭和 33 年の天神祭



天神祭



③ 住吉浜（住吉神社）と住吉祭

【建造物】

ア 住吉神社

住吉浜は、寛保元年(1741)、当時の町奉行である平山角左衛門の主導により、海を埋め立てて築造された。

住吉神社は、もともと浄土寺境内にあったが、住吉浜の埋め立てが完成した際、平山角左衛門が家伝の名刀を奉納し、社殿を現在の場所に移し港の守護神とした。

拝殿、本殿は、明治時代後期の建築であり、本殿は一間社入母屋造、向拝、千鳥破風付、銅板葺きである。注連柱は、尾道が発祥の地であり、住吉神社にあるものは文政3年(1820)（刻銘）とあり、国内最古である。また、本殿等の配置は、神社が建立されたときと異なっているが、この注連柱は往時のままであり、神社が尾道水道に正面を向けていたことを伝えている。

さらに、寛政9年(1797)築造（刻銘）の常夜灯は、市内最大級である。

住吉浜の築造により、港湾機能が強化され、北前船の入港が盛んになり、尾道は商都としても大きく発展することとなった。



市内最大級の常夜灯



住吉神社社殿



尾道水道に向けて立つ
国内最古の注連柱

イ 光明寺

住吉祭の背景となる千光寺山斜面地には、光明寺がある。光明寺は、元は天台宗の寺院であったが、建武3年（1336）に浄土宗に改宗し、現在に至る。本堂は、棟札によると延享4年（1747）に建築された。桁行五間、梁間六間の規模で、入母屋造、本瓦葺きである。

光明寺は、村上海賊に由来すると伝わる木造千手観音立像（重要文化財）を所蔵し、また、江戸時代には海運に関わる商人に多くの寄進を受けている。



光明寺本堂

ウ 志賀直哉旧居

同じく住吉祭の背景となる千光寺山斜面地には、文人の志賀直哉が暮らした旧居があり、大正時代の建築（『尾道市歴史的建造物及び町並み調査報告書』2009）である。木造平屋建て、三軒長屋、切妻の屋根をもつ。外観は、漆喰塗りの土壁と焼杉板貼り仕上げとなっている。ここに志賀直哉は大正元年(1912)～大正2年(1913)の間、移り住み、『暗夜行路』^{なかむらげんきち}の構想を練った。

また、歌人である中村憲吉が暮らした旧居も同じく近隣にある。中村憲吉旧居は、大正時代の建築（同上）で、木造平屋建てである。この建物は離れであり、主屋は残っていないが、尾道水道を見渡せる素晴らしい景観の場所に立地している。



志賀直哉旧居

エ みはらし亭

千光寺下斜面地の見晴らしの良い場所に、大正10年(1921)建築（棟札）のみはらし亭（登録有形文化財）がある。みはらし亭は、木造2階建て、入母屋造で斜面に沿った構造の元旅館である。約2mの高さの石垣を組み、その上に土台を載せて軸組を作り、斜面に対して大きく張り出した外観を形成している。尾道水道に面する側には、1階、2階ともに大きなガラス戸が使われ、眺望を十分に生かした造りになっている。千光寺の参道に位置し、徒歩で登る観光客は必ず目にする建物である



みはらし亭（登録有形文化財）

とともに、旧福井家住宅や中村憲吉旧居等と近接し、大正時代後期の和風建築を代表する貴重な遺構であり、景観上、きわめて重要な建築物の一つになっている。この建物は第1期計画において歴史的風致形成建造物に指定し、NPO法人により外観の趣はそのままだにゲストハウスとして改修されている。

【活動】

住吉祭（住吉花火まつり）

尾道の夏祭りの最後を飾るのが、住吉神社大祭礼である住吉祭（住吉花火まつり）である。十四日元町築出に鎮座する住吉神社の例祭で、7月下旬土曜日夜、神社前の尾道水道で開催される。町奉行・平山角左衛門の住吉浜築造の功績を称えとともに、商売繁盛・海上交通の安全を願って、住吉浜の海産物問屋の旦那衆が江戸中期ごろ始めたと言われる。

江戸時代の記録として、文政8年（1825）の『尾道志稿』に、「旧暦6月28日夜は住吉社の祭礼にて、入津の船数十、みな其帆柱上に燈を掲げる。詣る人多し」との記載がある。

大正4年(1915)の『尾道案内』に、住吉花火まつりが毎年行われ、海上渡御式があり、神輿の船に十数隻の船がつき、灯りが数百並び、花火が打ちあがる様子が記載されている。

祭礼当日には、「山型」^{やまがた}、「鳥居」^{とりい}、「御弊」^{ごへい}の提灯船3隻に加え、「火船」^{ひぶね}、「御座船」^{ござぶね}が渡御している。

「山型」は山を、「鳥居」は神社にある鳥居を模している。「御幣」は、神社でお祓いを受けるときに、宮司が持っている採物の名前と同じである。つまり、人々が山に登って、鳥居をくぐり、神社で神様をお招きすることを指し、火に守られた御神体はその奥に控えている状況を表す。また、花火の打ち上げ台船は、住吉神社に向かってほぼ垂直に設置させている。

その後、尾道水道に浮かぶ台船から、夜空に 13000 発の花火が打ちあがる。この花火の音と光は、光明寺や志賀直哉旧居、みはらし亭がある尾道水道北側の尾道三山周辺だけでなく、尾道水道南側の向島でも体感することができる。尾道市民だけでなく、数万人の観客が歴史的街並みの中で、花火をみて、ともに楽しむのである。

尾道水道という港町の象徴的な空間の中で、住吉浜ができたおかげで発展したことに対する感謝を込めて、花火を尾道水道に打ち上げることで、平山奉行を含めた港湾整備に携わった人々への顕彰を意味している。その本質は、港町尾道の神事であり、尾道水道を舞台とした「火」による感謝と祈りの時空である。



尾道水道と住吉まつり
(花火まつり)



昭和 30 年代頃の住吉まつり

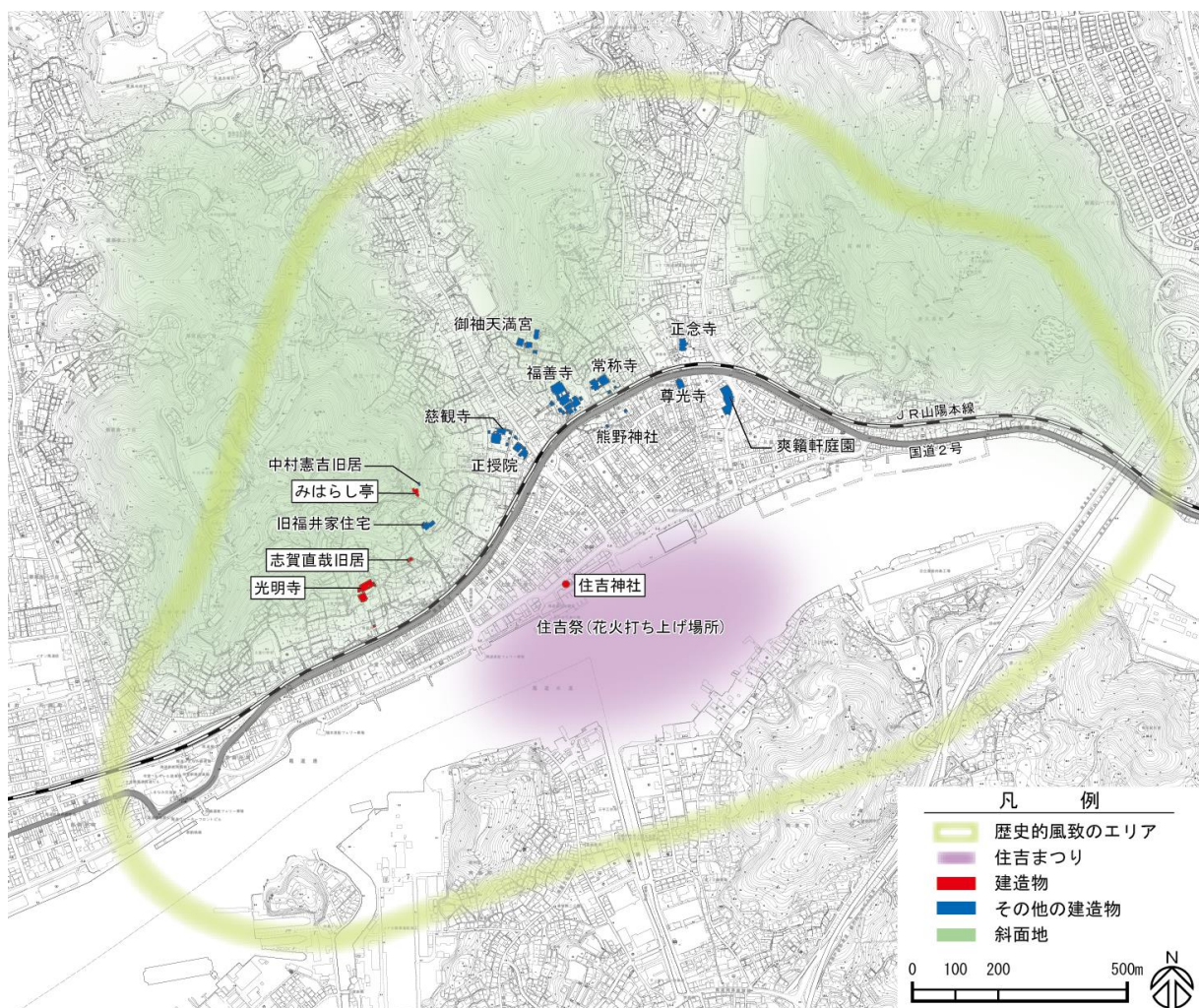


図 2-10 住吉浜(住吉神社)と住吉祭の歴史的風致エリア

まとめ

江戸時代の港町尾道は、西国街道、出雲街道、そして宿場町としての整備、北前船をはじめとした、各地との海運による中継機能の発展と港湾設備の整備など、瀬戸内海有数の港町として様々なインフラ整備が広島藩や尾道商人たちによって行われた。これは、中世からの歴史ある港町として、大きな財力を持っていた尾道商人とそれに注目した広島藩双方に大きな利点があった。

こうした尾道商人の活動は、寺社への寄進にも発展し、江戸時代に存在した寺院は最大 81 か寺とされる。また、そこで行われた祭礼行事も数多く、現在でも既述の祭礼行事が行われている。千光寺山^{せんこうじさん}、西国寺山^{さいこくじさん}山麓や町中を練り歩く祇園祭、天神祭、そして尾道水道を舞台とした住吉まつりと、港町と尾道水道を背景として伝統ある祭礼行事が継承されている。

また、近世の尾道商人、町人の賑やかな港町の文化である祭礼行事は、斜面地にある寺社を背景に、商家や民家、さらにはりめぐらされた小路を巡り行われている。

このように、中世・近世から近代の建造物や小路、坂道等が溶け込む市街地、港町尾道の基盤となった尾道水道、そして対岸の向島とが絶妙に調和し一体となった空間を舞台に、勇壮な祇園祭と天神祭、華やかな花火があがる住吉祭が尾道の夏を彩り、歴史的風致を形成している。



出雲街道の石標

(3) 近代商業都市尾道の寺社祭礼行事にみる歴史的風致

はじめに

尾道は、明治22年(1889)町村制施行に伴い尾道町となり、明治31年(1898)には広島市に次ぎ県内で2番目に市制を施行した。当時の尾道は北前船交易の名残があり、県内でも屈指の港町として、経済の中心地でもあった。明治24年(1891)には、福山～尾道間で山陽鉄道（現在のJR山陽本線）が開通し、尾道駅も開業したことにより、尾道の近代化は一層進むことになる。

鉄道敷設により町が2つに分断されたために、海側の商業地、港、山側の寺社域、住宅地（別荘等）という、独特の街並みと坂のまちの景観が誕生した。

海側には、江戸時代からの名残を示す商家が建ち並び、大正時代以降に尾道水道沿いに旅館魚信や竹村家などの料亭や旅館が増えていった。そして、旧尾道商業会議所などの洋風の公共建造物、住友銀行尾道支店や尾道銀行本店といった経済の中心地らしい建築物が集中する銀行浜など、和と洋が混ざり合う景観が形成された。また、市街地の中央部には、昭和13年(1938)に機能強化した尾道中央棧橋ができ、同年には住友銀行尾道支店が銀行浜から西側の土堂町へ移転した。（旧三井住友銀行尾道支店）

山側には、中近世の建築物の周辺に和風住宅や、津留邸をはじめとする和洋折衷住宅（群）が立地する独特の景観が形成された。昭和時代初期には、沿岸部に造船所が建設され、労働人口の増大により、さらなる町の発展を遂げた。また、志賀直哉や中村憲吉の旧居のほか、旧福井家住宅、みはらし亭、旧和泉家別邸（通称「尾道ガウディハウス」）などが立地するとともに、東の久保小学校、西の土堂小学校が、昭和時代初期に鉄筋コンクリートで建てられ、急増する児童を受け入れた。

こうした近代商業都市として発展した尾道においても、寺社に多くの寄進が行われ、様々な歴史的建造物が建てられた。そこでは、ベッチャー祭やみなと祭、山王祭などの近世の祭礼行事や人物に由来する祭礼行事が行われている。

このように、尾道においては、中近世の街並みに近代の街並みが重なり合い、様々な時代の建造物が共存するとともに、祭礼行事においても、時代が重なり合いつつ、伝統が継承されている。また、常称寺に代表されるように、中近世の建造物で構成されていた境内に山陽鉄道や国道が通り、敷地レベルにおいても歴史の重層する空間を形づくることになった。

尾道では、中世・近世・近代、そして現代の入り交じる空間の中で、中世や近世を起源とする祭礼・行事だけでなく、近代に起り、盛んになった行事が今も行われている。

① 一宮神社とベッチャー祭

【建造物】

ア 一宮神社（吉備津彦神社）

東土堂町にある一宮神社（吉備津彦神社）は、備中国の吉備津彦神社の什器（大鰐口）が何かの由縁でこの地に來たのを奉還したが、再び舞い戻ってきたことを契機に、備中国の吉備津彦神社の境内社である一宮社の分霊を行ったのが起源である。御神体の大鰐口は、そのときのものといわれている。

社殿は、宝土寺境内にあり、本殿は明治時代



一宮神社（吉備津彦神社）

の建築である。本殿については、松木家文書（大正時代）によると、明治 12 年(1879)、土堂町の山下友太郎が所有の旧地を寄付したため、ここに改築したとある。本殿は、一間^{いっけん}杜^む流^{りゅう}造^{ぞう}、本瓦葺きである。境内からは、尾道水道が眺望できる。

イ 旧尾道商業会議所

尾道商業会議所は、大正 12 年(1923)10 月に尾道商業会議所創設 30 周年の記念事業として建設された。当時としては最先端の鉄筋コンクリート造りで、外観も洋風建築様式を取り入れ、2 階は 3 階と吹き抜けの階段状議場となっていた。

この建物は、商業会議所として建築された鉄筋コンクリートの建築物としては、現存する日本最古のものであり、平成 16 年(2004)に尾道市重要文化財に指定された。さらに、市内観光の休憩や案内並びに尾道市の商業史に関する資料展示を行うため、復元改修し尾道商業会議所記念館として、平成 18 年(2006)3 月 4 日に開館した。



旧尾道商業会議所（尾道市重要文化財）

ウ 旧三井住友銀行尾道支店

旧三井住友銀行尾道支店は、昭和 13 年(1938)建築（『広島県の近代化遺産』1998）の鉄筋コンクリート造、地下 1 階付 3 階建ての建物である。通称「銀行浜」（久保一丁目）から現在地の土堂町に移転した際に新築した建物であり、外壁の塗り直しはあるものの、全体的に昭和初期の特徴を残している。住友銀行の建造物として、住友本店臨時建築部の流れをくむ、現在の日建設計の前身である長谷部・竹腰建築事務所の設計であり、昭和初期の銀行建築物の好例である。現在は、市民の文化活動の発表の場、尾道の歴史・文化を伝える場として改修を行い、令和 5 年(2023)5 月 1 日に「まちなか文化交流館（Bank）」として開館した。



旧三井住友銀行尾道支店（尾道市重要文化財）

エ 旧住友銀行尾道支店

旧住友銀行尾道支店は、明治 37 年（1904）の建築（『広島県の近代化遺産』1998）で木造モルタル塗り、寄棟造^{よせむねづくり}、平入、本瓦葺きである。石造を模したモルタル仕上げという珍しい造りであり、特にファサードは、アーチを用いた開口部周りに誇張した要石を配し、偉観を高めている。



旧住友銀行尾道支店前の祭りの様子

オ 旧尾道銀行本店

旧尾道銀行本店（おのみち歴史博物館）は、大正 12 年(1923)の建築（『広島銀行創業百年史』1979）で、鉄筋コンクリート造 2 階建てである。正面の外壁は、レンガを積み、出入り口には切石を積んでいる。内部は、展示スペースを確保しながらも、銀行当時のカウンターや金庫が保存され、博物館として活用されている。



祭りのルートに面して立地する旧尾道銀行本店（尾道市重要文化財）

カ 旅館魚信

旅館魚信は、明治時代の大型和風建築（『尾道市歴史的建造物及び町並み調査』2009）で、数奇屋造^{すきやづくり}の華やかな建築意匠をもち、細部にまで繊細な意匠が施されている。



旅館魚信の前を練り歩くベッチャー祭の一行

キ 竹村家

竹村家主屋、門及び塀（登録有形文化財）は、大正 9 年(1920)の建築で、寄棟造の純和風建築である。料理屋として開業し、現在は割烹旅館となっている。内部は書院造^{しよいんづくり}を基本とし、竹細工の装飾が随所にみえ、落ち着いた空間を醸し出している。



竹村家主屋、門及び塀（登録有形文化財）

ク 旧和泉家別邸^{いずみけ}

JR 尾道駅北西側の近代の街並みが残る三軒家町に建つ旧和泉家別邸（登録有形文化財）は、通称「尾道ガウディハウス」とも呼ばれ、NPO 法人尾道空き家再生プロジェクトの活動拠点でもある。旧和泉家別邸は、棟札によると昭和 8 年（1933）の上棟（棟札による）で、木造 2 階建て、入母屋造り、棧瓦葺き、一部地下室がある。洋室つきの和風住宅で、斜面地を利用した石垣の上に地形に沿って建てられている。内部は良質な木材と手の込んだ造作に満ちており、また、タイル張^{かまど}竈や防空壕を兼ねた地下室など、昭和初期の生活スタイルを今に伝えている。



旧和泉家別邸（登録有形文化財）

その他に、一宮神社の西方には、昭和 12 年(1937)建築（『広島県の近代化遺産』1998）の土堂小学校校舎がある。校舎は、三階建てで、南端部の階段室のみ四階建て、鉄筋コンクリート造、ラーメン構造である。昭和 30 年代に校舎の一部が増築されている。



土堂小学校校舎

また、土堂小学校の西側一帯は、大正～昭和初期に建てられた和洋折衷住宅（群）があり、和風建築に一部洋室あるいは洋館がつく、いわゆる洋館つき住宅で、街並みと尾道水道、多島美の瀬戸の島々を望む、素晴らしい景観を有するこの斜面地に建ち並んでいる。



和洋折衷住宅(群)



津留邸（洋館つき住宅）

【活動】

ベッチャー祭

ベッチャー祭は、一宮神社（吉備津彦神社）に伝わり、厄を祓い、無病息災を願う祭りであり、尾道の晩秋を代表する行事でもある。宝土寺文書『一宮社年誌』（天保 14 年(1843)）には「市内に疫病が発生しているので、一宮社の神輿を練り歩かせてほしい」という住職から町年寄への嘆願が記されている。また、松木家文書「一宮祭典の由来」には、「里俗「ベッチャー」なるものを案出し之を一宮神社に寄進す。（中略）ベッチャーと称するものは、一般児童の称呼にして、神輿渡御に際し其前列に天狗・般若・大六天等の従ふものにして（略）」との記載がある。

祭礼は、毎年 11 月 1 日から 3 日まで行われ、最終日の 3 日には、一宮神社付近で奇妙な面をつけ、神輿を先頭に獅子、ショーキー（天狗面に鳥兜をかぶり、ささらを手にするひと）・ソバ（般若面をつけて、飾られた祝い棒を持つひと）・ベタ（大六天面をつけて、飾られた祝い棒を持つひと）の鬼の格好をした若者が街へ繰り出すものである。

3 日の行列では、氏子総代が白の御幣を持って先頭に立ち、獅子頭をかぶった暴れ獅子が先払いとして従う。続いて、神の寄り代としてのショーキー・ソバ・ベタの 3 人が半袴の姿で行列の警護にあたる。また、神輿のそばで囃子方が、締太鼓・チャンギリ・四つ竹等で囃す。

まちかどからは、一般の子供たちが、先を競って「ベッチャー」と大声で囃しながら行列の邪魔をする。警護役たちが追いかけて祝い棒やささら



町中を練り歩くソバ



一宮神社境内で「ささら」を持つショーキー



ベッチャー祭の神輿

でたたく。子供たちは興奮して逃げ場を失い、観客の中へと逃げ込むが、それを追いまわす警護役は、相手をかまわずつついたりたたいたりするため、観客を巻き込んでの騒ぎとなる。これが神輿のお庫入りまで続くことになる。

ベタ・ソバに「祝棒」で突かれると子宝に恵まれ、ショーキーに「ささら」で叩かれると頭が良くなると伝えられている。

ベッチャー祭という名称、ショーキー・ソバ・ベタの三者三様のユーモラスな鬼のような出で立ち、それを追いかけて、邪魔をする形で行列に入り込む子供たち、ショーキー・ソバ・ベタに追いかけられ、たたかれたりして、それが御利益になることなど、特徴的な祭礼行事である。

尾道の子供ならば、一度はたたかれたり、鬼を追いかけて、あるいは恐るおそる見たりしながら成長する。この地で育った者にとって、街並みと行事が一体となって記憶に残る尾道の原風景の一つである。



昭和 30 年～40 年頃のベッチャー祭 (ベタ)



昭和 33 年頃のベッチャー祭 (ショーキー)

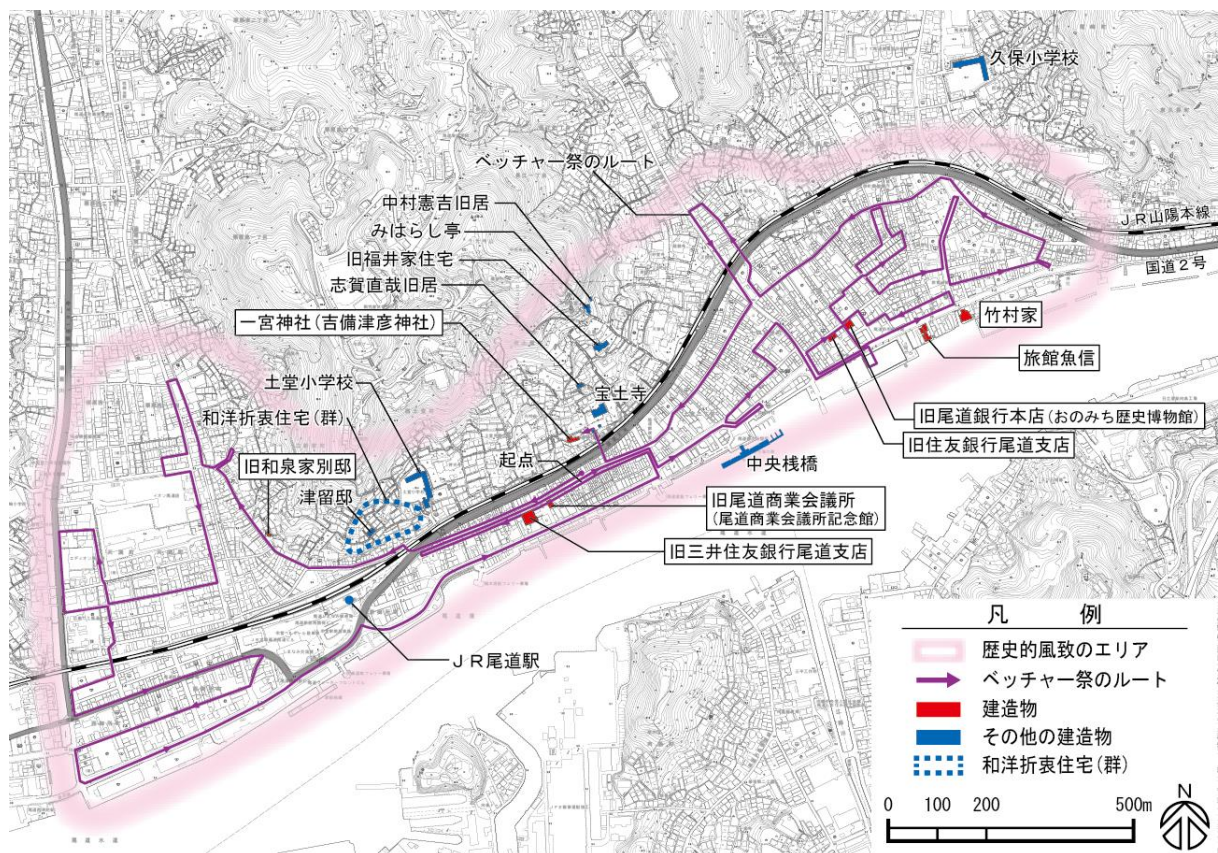


図 2-11 一宮神社とベッチャー祭の歴史的風致エリア

② 住吉浜（住吉神社）とみなと祭

【建造物】

ア 住吉神社の^{しょうとくひ}頌徳碑

寛保元年(1741)に完成した住吉浜（P71 を参照）の築造を主導した町奉行 ^{ひらやまかくざ}平山角左衛門に対する感謝の念は、明治になってからも町の人に引き継がれ、明治 29 年(1896)には浜問屋の人々によって頌徳碑が建てられた（刻年銘あり）。高さ 2.5m もあるこの石碑は、現在ではもとの位置から反対の西南隅に移しかえられている。



頌徳碑



浄土寺阿弥陀堂横にある
平山角左衛門の墓

イ 尾道中央棧橋

尾道中央棧橋は、荒神浜に位置し、昭和 13 年(1938)築造（『広島県の近代化遺産』1998）の建造物である。棧橋本体は船が岸壁に平行に発着する形式である。長さ約 20m、幅約 10mの浮棧橋の両側に長さ約 20m、幅約 8 mの浮棧橋^{かん}を 2 函結び、計 5 函^{かん}が岸壁に平行に連ねられている。



尾道中央棧橋

【活動】

みなと祭

町奉行 ^{ひらやまかくざ}平山角左衛門の功績を称え、尾道のさらなる発展を祈念して、昭和 9 年(1934)、尾道商工会議所議員総会において、「尾道港開発の功労者、平山角左衛門を祭神とする例祭として年中行事をなす。」と「港祭」創始に関する決議が行われた。

翌昭和 10 年(1935)、第 1 回尾道みなと祭が、4 月 1 日から 5 日間盛大に開催された。昭和 12 年(1937)に第 3 回が開催されたが、時局に鑑み、それ以降は一旦中止され、第 4 回は昭和 22 年(1947)の復活・開催まで待つことになった。以来、毎年開催して今日に至っている。現在では、4 月の第 4 土日の 2 日間で行われている。

祭りの最初に、平山奉行の墓（浄土寺境内）の隣にある ^{じょうどじ}浄土寺阿弥陀堂で法要が営まれ、次いで平山神社を合祀する住吉神社で神事が行われる。この後、パレードやその他数々のイベントが行われ、多くの参加者、見学者で賑わうことになる。また、市街地の道路や商店街にはみなと祭の幟旗やバナーが設置され、町全体で祭りの雰囲気を感じ



みなと祭でのパレード（尾道本通り商店街）

ることができる。

尾道の近代の祭礼・行事は、近世の尾道を継承し、市民との関わりをより強める形で行われている。

その代表がみなと祭であり、江戸時代における住吉浜の築造に対する感謝の念が、時代を超えて現在まで継承されるとともに、一般の市民が担い手や行事の主役として参加するのである。

また、みなと祭のルートは、太鼓おどりやベッチャー祭等と重なっている。つまり、中世や近世、近代そして現代が入り交じる街並みの中で、中世、近世に起源を持つ祭礼・行事だけでなく、近代の行事も行われており、空間としての街並みに加え、人々の活動も歴史の重なり合いを表わしている。



昭和30年代のみなと祭

尾道市は、市制70周年（昭和43年）、開港800年の祝賀の式場で、平山角左衛門に名誉市民の称号を贈り、その功業を永遠に称えた。尾道市民は、歴史的風致を引き継ぐと同時に、先人への感謝という価値観を持ち続けている。



昭和10年、11年頃のみなと祭



昭和10年、11年頃のみなと祭

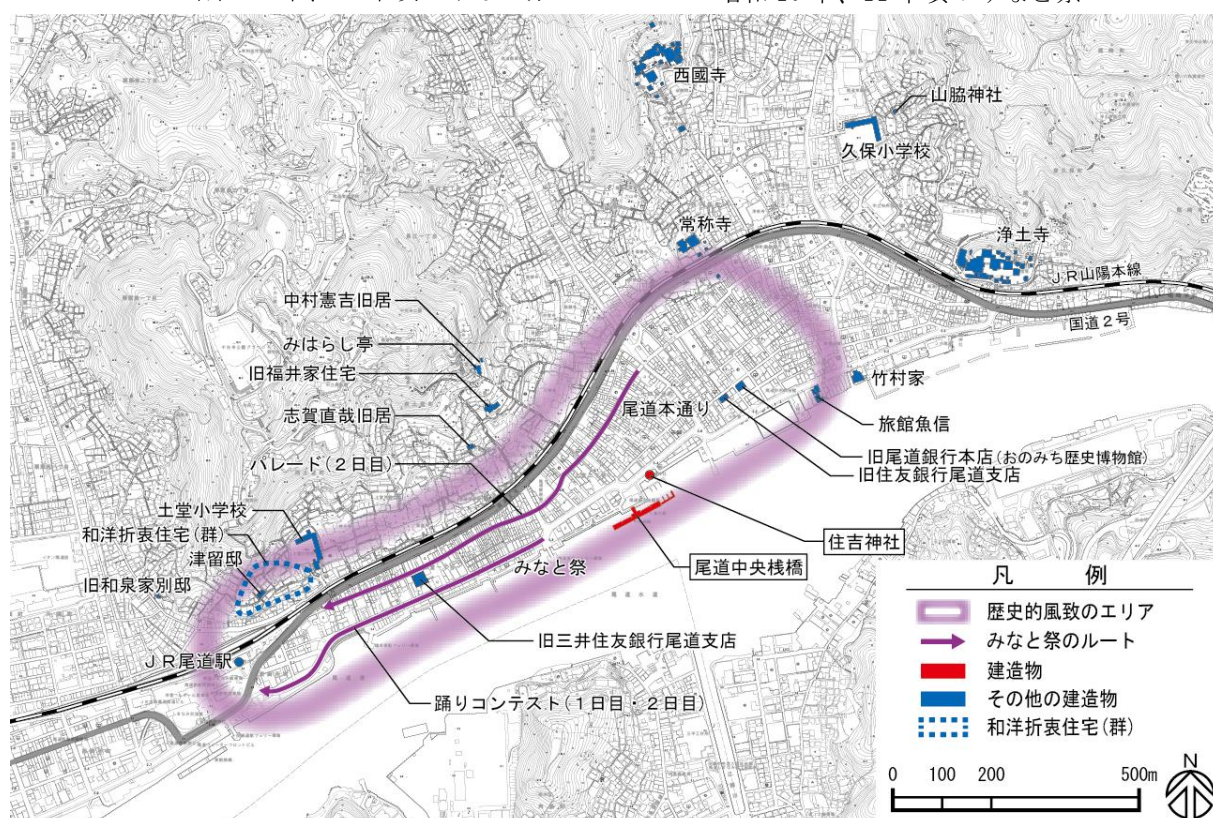


図2-12 住吉神社とみなと祭の歴史的風致エリア

③ ^{やまわきじんじや}山脇神社と^{さんのうさい}山王祭

【建造物】

ア 山脇神社

浄土寺山西側斜面地に位置する山脇神社は、^{おおやまつ}大山津美之神を祀り、「^{さんのう}山王神社」、「山王さん」ともいわれる。本殿は一間社流造（間口3尺、奥行3尺）の建築で、棟札には享保13年（1728）の年記がある。

この神社には「こま犬」の代わりにユーモラスな表情の「こま猿」が置かれている。

猿は山王さんのお使いとされ、昔この一帯に山火事が起こったとき、猿が騒ぎ民衆に知らせたという伝説がある。

かつては古くから伝わる神社を尾道七社といい、山脇神社はその一社であった。他には八幡宮、艮社、厳島明神、丹生明神、祇園社、天満宮がある。



山脇神社の本殿と「こま猿」

イ 西郷寺

山脇神社参道南側には、^{じしゅういつちんしょうにん}時宗一鎮上人によって創建されたと伝わる西郷寺がある。本堂（重要文化財）は、桁行七間、梁間八間の規模で、寄棟造、本瓦葺きで、文和2年（1353）に建築（棟札写による）された。和様を基調とした住宅風の建物で、正面から見た屋根の勾配は背後の丘陵尾根の形状と調和しており、優美な姿を見せている。

山門（重要文化財）は、棟札により、応永2年（1395）の建築である。柱の前後に支柱をたてた棟門で、屋根は切妻造、本瓦葺きである。



西郷寺本堂（重要文化財）

近隣には、昭和8年（1933）建築（『広島県の近代化遺産』1998）の久保小学校校舎がある。校舎は、鉄筋コンクリート造3階建てで、校舎の平面はL字形で、外観は柱を外側から突き出したバットレス（控壁）として表現し、縦長のガラス窓を並べ、垂直性を表している。土堂小学校と並び、広島県を代表する学校建築である。

他にも、周辺には斜面を利用した昭和初期の和風住宅も見られ、斜面地の歴史と暮らしの中にさりげなく建つ山脇神社とともに、山王祭の歴史的風情を醸し出している。



久保小学校（昭和8年建築）

【活動】

山王祭

尾道に夏を告げる「山王祭」は、旧暦4月の申の日（5月末）に行われる山脇神社の例祭である。『尾道志稿』（文化13年（1816））によると、その日には多くの猿が来たと

いう。また、別名「ゆかた祭り」とも呼ばれ、尾道では、この日から浴衣を着る風習がある。

この祭りに関しては、文政5年(1822)に書かれた鳴子庵稲井の『塵塚』に山脇神社参道に店が出ていることが記されている。

また、大正4年(1915)の『尾道案内』によると、松明をともし、浄土寺山山頂まで登ったり、参道の途中に種々の趣向を凝らしたりした「山王の造り物」が置かれ、尾道名物となっていたとある。

現在では、山王神社で宮司による疫病退散や厄払いなどの祈祷が行われ、参拝者は、境内から参道周辺をめぐり、様々な出し物を楽しむ。神社の参道には様々な屋台が並び、浴衣の参拝客とともに、春から初夏の風情が感じられる祭礼となっている。近隣の久保小学校の校庭等では夜店などもでて、また福引やお菓子の接待も行われ、浴衣を着た子供たちも楽しむのである。

山王祭は、住宅に囲まれた小さな社殿や周囲の小路（路地）、坂の道を舞台に行われ、そこを歩く浴衣を着た参拝者等が、尾道らしさと初夏の風情を醸し出している。夕方になると祭りの雰囲気はさらに高まり、尾道水道の西に沈む夕日、そして夜景を楽しむことができる。

尾道の他の祭礼・行事は、勇壮さや荘厳さ、舞台（ルート）の広がりを感じる場合が多いが、この山王祭は、住宅地としての街並み等と相まって、やさしさや穏やかさを醸し出す行事である。



山王祭の日から浴衣を着る風習



山脇神社や久保小学校等が位置する浄土寺山西面



久保小学校と尾道東高校（左）の間のレンガ塀のある路地。この先の斜面地に山脇神社が位置する

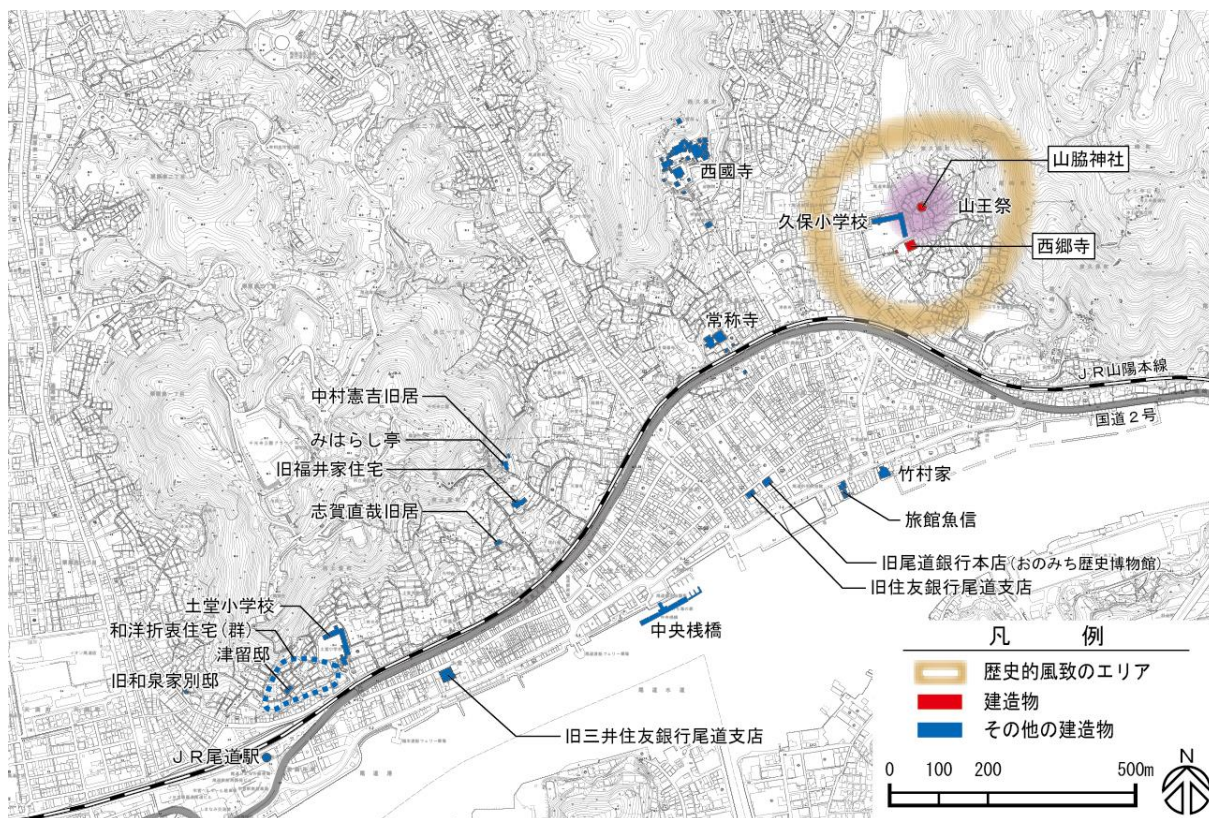


図 2-13 山脇神社と山王祭の歴史的風致エリア

まとめ

近代の歴史的建造物は、尾道の旧市街地の平地部においては、ほぼ全体に点在する。斜面地の市街地は、寺社を除けば、その大半は近代以降に形成されたものであり、近代の町割や坂、そして多数の歴史的建造物が中世・近世の建造物とともに存在する。

こうした市街地のうち平地部のほぼ全体において、動きや力強さを感じるベッチャー祭や初夏を感じさせるみなと祭が行われる。特にベッチャー祭は、旧尾道商業会議所や旧三井住友銀行尾道支店などが位置する商店街、旧住友銀行尾道支店や旧尾道銀行本店が位置する銀行浜など比較的広い通りだけでなく、小路にも入り込み、一宮神社や旧和泉家別邸のように斜面地に所在する歴史的建造物やその周辺も舞台となる。2つの祭礼行事とも、ルート沿いやその近くに近代の建造物があり、各所からは中世から近代の歴史的建造物が存在する斜面地の市街地を望むことができ、尾道水道も身近に意識できる。

一方、穏やかさを感じる山王祭は、山王神社周辺に限定された祭礼行事であるが、周辺の西郷寺や昭和初期に建てられた久保小学校、所々から尾道水道や尾道三山、西國寺、千光寺などが眺望でき、視覚的には時代の重層性や広がり意識でき、そのことが歴史的な風情を高めている。

このように、中世・近世と近代の建造物が溶け合う市街地において、広がりを持って繰り広げられる活動的なベッチャー祭とみなと祭、地域限定の穏やかな山王祭が行われ、ともに歴史が重層する港町、そして近代商業都市尾道を意識することのできる歴史的風致が形成されている。